

平成26年度

農業試験場

業務年報

平成27年3月

福井県農業試験場

平成26年度業務年報目次

1. 研究成果

(1) 実用化技術	1
(2) 指導活用技術	1
(3) 関東東海北陸農業試験研究推進会議へ提出した研究成果情報	2
(4) 登録品種・特許等	2

2. 研究の概要

1) 農業試験場

(1) 福井発の五つ星ブランド水稲新品種の育成	4
(2) 水稲の良食味の科学的解明—おいしさの見える化—	4
(3) 水稲の高温耐性に関するDNAマーカーを利用した育種技術の開発	4
(4) 生き物にやさしい“ポストこしひかり”特裁技術の開発	4
(5) 大規模営農組織の生産性向上技術の開発	5
(6) 直播圃場で多発する新型ニカメイガの被害を減らす総合的防除技術の確立	5
(7) 化学農薬を使わずにうどんこ病を防除できるふくいオリジナル生物農薬の開発	5
(8) クリムゾンクローバーの時期別肥効の明確化による水稲収量品質の向上技術	5
(9) 福井特上米の栽培技術の確立	5
(10) 若狭地域に適したアズキ栽培技術の確立	6
(11) 地域未利用資源ヒシを活用した堆肥の活用	6
(12) 水稲のいもち病等に有効な微生物農薬の開発	6
(13) 病害虫発生予察事業	6
(14) 病害虫防除所運営事業	8
(15) 農薬抵抗性検定事業	9
(16) 重要病害虫等侵入警戒調査事業	9
(17) 土壌保全対策費（土壌環境基礎調査事業）	9
(18) 肥料検査登録事業	10
(19) 試験研究課題化・評価システム事業（経営・マーケティング調査）	10
(20) 「ポストこしひかり」有利販売調査事業	10
(21) 奨励品種決定調査事業	10
(22) 原原種・原種ほ設置事業	10
(23) 優良種子生産体制確立	11
(24) キヌア栽培技術の開発	11
(25) ソバの血圧低下作用効果の解明と加工技術の開発	11
(26) 農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎事業	11

2) 園芸研究センター

(1) スペシャルミディトマトの新品種育成	11
(2) 直売・観光で売れるイチジクとブドウの品種選抜と、イチジクの長期どり作型の開発	11

(3) 県民と先端技術で作る、ふくいオリジナルキクの開発 (マイクロمام)	12
(4) スマートアグリ技術の開発 (ミディトマト・パプリカ・夏イチゴ)	12
(5) 農業電化協会委託試験	12
(6) 省エネ・低コストでいつでも作れる施設野菜の技術開発	12
(7) 作業性の高い水田転換ウメ園の増収技術の確立	13
(8) ウメ多収性品種‘福太夫’‘新平太夫’の特性を生かした安定生産技術の開発	13
(9) 水田を活用した省力果樹生産技術の開発 (ミカン)	14
(10) 水田を活用した省力果樹生産技術の開発 (モモ・スモモ)	14
(11) 簡単に組み立てるホームユース切り花栽培技術の開発	14
(12) 新品種開発 (ブドウ)	14
(13) 効果的な高温対策によるハウスブドウの品質向上	15
(14) 伝統地場農産物原種供給事業	15
(15) くだもの産地育成事業	15
(16) 果樹の新優良品種選定	15
(17) いきいき里山特産品育成事業	15
(18) 伝統野菜を利用した商品開発	16

3. 普及指導業務実績

(1) 県全域の普及指導活動の支援	16
(2) コシヒカリ特A技術の普及拡大	17
(3) 水稲エコ農業栽培技術の確立	17
(4) 大豆「里のほほえみ」生産・利用活動支援	17
(5) メガファーム育成による農地の集積・集約化	18
(6) 競争力のある農産物づくり戦略	18
(7) 6次産業の推進および県産大豆の付加価値向上支援	19
(8) ブドウ生産農家の育成	20
(9) 越前水仙の販売拡大と安定生産の推進	21

4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1) アグリチャレンジLABOクラブ	22
(2) 園芸教室	24
(3) 水田農業・水稲作飛躍のための技術研修会	25
(4) スマート園芸研修会	25
(5) 農業試験場プレスリリース実績	26

5. 農業者、消費者との意見交換

(1) 福井市内における酒米へのニーズ調査	26
(2) ポストこしひかり開発に関する専門家からの情報収集	27

6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

(1) 農業試験場刊行成績書	28
(2) 論文	28
(3) 雑誌	28
(4) 著書	29
(5) 学会等講演発表	29
(6) 広報	30

7. 職員の研修

・職員の研修	31
--------------	----

8. 一般報告

(1) 施設	31
(2) 予算	31

1. 研究成果

(1) 実用化技術

No.	技術名	内容	普及対象
1	クリムソクローバーを利用した美味しい米づくり	美味しい米づくりに向けて、クリムソクローバーの栽培、鋤き込みおよび施肥管理法を開発した。10月上旬中に3～4kg/10a 播種し、鋤き込み時期は、50cm×50cm角の生草重500gの時点を目安にする。移植は5月中旬～6月上旬とし基肥無施用。生育中期は葉色が濃く推移し、穂肥は生育を見て対応する。	坂井地区の花あかり生産組織
2	水田転換ウメ園の排水対策技術	作業性が良い反面、排水性が悪い水田転換園は樹勢が弱くなりやすく、収量も低くなる。排水溝を設置することにより、排水性が改善され、水田転換園でも畑地ウメ園と同等にウメが生育できる。	ウメ生産者
3	簡単な防除でウメ花枝の出荷量が向上	シンクイムシ類に食害されたウメの新梢は、ウメ花枝として出荷できなくなる。果樹用交信かく乱剤を効果的に利用することで、シンクイムシ類の食害を減らし、ウメ花枝の出荷量を増やすことができる。	ウメ花枝出荷者

(2) 指導活用技術

No.	技術名	内容
1	食味ランキング特A相当米の生産条件	(財)日本穀物検定協会の米の食味官能試験で、特A並に評価されるためには、玄米タンパク含有率5.5～6.5%、整粒歩合70%以上、味度80以上が必要である。栽培面では、6月移植による高温登熟回避および青糲率3割での早刈りで食味向上効果がある。
2	転作小豆の高品質栽培法	品種「エリモショウズ」を用い、7月中下旬に条間35cmの狭畦栽培を行うことで、普通型コンバインを用いた全刈りで170kg/10a以上の収量が得られる。また、選別機器による製品歩留りは90%以上である。なお、土や石の混入を防ぐため、収穫作業には細心の注意が必要である。
3	三方湖のヒシの堆肥化技術	三方湖で除去されたヒシを有機質資源として活用するため、これを堆肥化する技術を開発した。ヒシを採取後、乾燥・粉碎してから、米ぬか・籾殻を加えて1か月堆積、随時切り返しを実施することでヒシ殻の無い堆肥が作製できる。また、ヒシを原料にした堆肥は牛糞堆肥に比べ、窒素、リン酸、加里の含有量が高い。
4	ウメ‘紅サシ’の施肥前栄養診断	ウメ‘紅サシ’の新梢の葉面積23cm ² 以上、葉緑素計の値6月上旬41(葉中窒素含有率3.0%)以上、8月上旬47(葉中窒素含有率2.5%)以上を目安として、施肥時期前に簡易栄養診断をすることができる。

(3) 関東東海北陸農業試験研究推進会議へ提出した研究成果情報

・イチオシ技術

なし

(4) 登録品種・特許等

1) 品種登録・特許等出願の状況

・本年度は、新たな品種登録、特許等の出願、登録などはなかった。

2) 保有する登録品種・特許等知的財産一覧

1. 品種の登録

品 種 名	植物の種類	品種登録年月日	登録番号
越のパール	らっきょう種	平成12年10月4日	8370
越のレッド	らっきょう種	平成12年10月4日	8371
若狭の歌姫	ゆり属	平成14年6月20日	10318
ガーデンスター	ラナンキュラス属	平成17年1月19日	12609
福太夫	うめ種	平成17年3月23日	12985
リリライトピンク	ゆり属	平成17年3月15日	15214
リリレモンイエロー	ゆり属	平成17年3月15日	15215
リリブライトレッド	ゆり属	平成17年3月15日	15216
さきひかり	稲種	平成18年3月9日	13875
オータムヴィオレミニ	らっきょう種×きいとらっきょう種	平成19年3月2日	14993
オータムヴィオレ2号	らっきょう種×やまらっきょう種	平成19年3月2日	14995
オータムヴィオレ3号	らっきょう種×やまらっきょう種	平成19年3月2日	14994
イクヒカリ	稲種	平成19年3月15日	14999
ニューヒカリ	稲種	平成21年7月31日	18349
まんぷくもち	稲種	平成22年2月19日	19053
オータムヴィオレミニピンク	らっきょう種×いとらっきょう種	平成22年6月28日	19544
あきさかり	稲種	平成23年3月2日	20431
越のルビーうらら	トマト種	平成23年8月29日	20951
越のルビーさやか	トマト種	平成23年8月29日	20952

2. 特許の取得

発明の名称	特許登録年月日	特許登録番号
電子レンジとポリエチレン袋を用いた低コスト植物無菌培養方法	平成19年9月14日	4009685
ラッキョウの根茎部連続切除装置	平成24年10月5日	5097980
稔性抑制キク科植物の作製方法	平成25年10月4日	5374785

3) 特許の出願

発明の名称	特許出願年月日	特許出願番号
地下水位検出制御装置	平成25年10月 1日	特願2013-216780

4) 実用新案の取得

発明の名称	実用新案登録年月日	実用新案登録番号
梅果実の整列を補助する板	平成21年6月24日	3152017

5) 品種利用権許諾・特許権等実施許諾 一覧

1. 品種利用権許諾

品 種 名	許諾件数	品 種 名	許諾件数
越のパール	2件	オータムヴィオレ2号	2件
越のレッド	3件	オータムヴィオレ3号	1件
ガーデンスター	1件	イクヒカリ	3件
福太夫	1件	ニューヒカリ	1件
リリライトピンク	1件	まんぷくもち	1件
リリレモンイエロー	2件	あきさかり	2件
リリブライトレッド	3件	越のルビーさやか	1件
オータムヴィオレミニ	2件		

2. 特許権実施許諾（出願中の特許を含む）・実用新案権実施許諾

発明の名称	特許等種別	許諾件数
ラッキョウの根基部連続切除装置	特許	1件
電子レンジとポリエチレン袋を用いた低コスト植物無菌培養方法	特許	1件
地下水位検出制御装置	特許出願中	1件
梅果実の整列を補助する板	実用新案	1件

2. 研究結果の概要

1) 農業試験場

(1) 福井発の五つ星ブランド水稲新品種の育成 (平成 23～29 年度)

ポストコシヒカリ開発部 富田桂

昨年選抜した 100 種 (F8 世代) の系統を圃場に栽植し、固定度に注意しながら草姿、出穂期等の生育調査を行った。これら 100 種の候補を刈り上げ、収量、品質等の農業特性調査および食味官能試験を行い、10 種を選抜した。

(2) 水稲の良食味の科学的解明—おいしさの見える化— (平成 25～29 年度)

ポストコシヒカリ開発部 小林麻子

アミロペクチンの遺伝子 (アミロペクチン分枝・側鎖伸長酵素である *BEI1b* 及び *SSI1a*) が変異したコシヒカリまたは日本晴の突然変異体の中から、食味に変化している系統を見出した。また、インド型イネの染色体領域を導入したコシヒカリの染色体断片置換系統の中から食味に変化している系統を見出した。これら系統の理化学的特性を明らかにした。

(3) 水稲の高温耐性に関する DNA マーカーを利用した育種技術の開発 (平成 25～26 年度)

ポストコシヒカリ開発部 小林麻子

ハナエチゼンの高温耐性遺伝子 *qWB6* に関するファインマッピングを行い、候補領域を 13.4kb に絞り込むとともに、候補遺伝子を選定した。新潟早生の高温耐性 QTL、*qWB9* の候補領域を 15.6cM から 2.8cM に絞込んだ。

(4) 生き物にやさしい“ポストこしひかり”特裁技術の開発 (平成 26～29 年度)

作物部 酒井究、奥村華子

① 除草機走行による残草率は、除草機の機種で大きな差異はなく、移植後 10 日の除草で約 20%、これに加え移植後 20 日の除草を実施すると約 10% となった。欠株は主に移植 10 日後の除草で発生し (3～14%)、除草時の水田条件による影響が大きいと考えられた。雑草多発田のため、除草機走行後の残草本数は多かったが、無除草に比べると 10～30% 増収した。また、移植後 25 日目頃の 1 回の除草機走行でも、増収効果があった。

ウキクサを水面全体に浮かべることで、コナギ等の雑草抑制効果が見られた。ウキクサによる遮光により、水稲の初期生育が抑制される傾向があったが、無除草区に比べて収量は 116% と抑草による増収が見られ、品質への影響も見られなかった。

春に生わらをすきこむ処理を行うと、最も効果の大きい区で雑草の発生を無処理区の 23% にまで抑えることができたが、収量を抑制する傾向にあり、雑草だけでなく稲体への影響も大きいことが推定された。

有機環境部 細川幸一

② あきさかりを用いて有機 50%、100% 一括施肥試験を実施した。収量、整粒割合は有機 50% が慣行と同等、有機 100% は慣行の 1 割減であった。また、ヘイケホタル幼虫への育苗箱施用殺虫成分の感受性を評価し、チアメトキサムは影響がないことを明らかにした。

有機環境部 高岡誠一

③ 長期残効型育苗箱施薬剤の防除効果

長期残効型育苗箱施薬剤の殺虫成分はイネの葉や茎に移行し、カメムシが水分等を摂取した際に体内に取り込まれ、効果が発現することを検証した。現地圃場において、慣行防除に比べ斑点米の防除効果は同等であることが認められた。

・隔年防除の現地実証

南越前町杉谷地区の山間部の水田で、育苗箱施薬使用後のイネミズゾウムシ等の発生量は少なく、次年度以降は育苗箱施薬の使用を削減可能であることを確認した。また、農試内発生予察圃場で紋枯病菌に対する本田粒剤処理の効果を調査し、発病抑制

効果および薬剤処理による減収被害の低減を確認した。

(5) 大規模営農組織の生産性向上技術の開発 (平成26～28年度)

作物部 笈田豊彦・中村真也

市販水位センサーe-Tapeに送信機をつなぎ、ネット上で圃場の水位を把握するシステムを試作し、±5mmの精度を確認した。直播栽培での品種比較では、あきさがりがあきだわら、てんこもり、日本晴より総合的には優れた。播種23日前に代掻きしても特段問題なく、代掻き時期を広げられる可能性を示した。

コーティング資材による直播栽培の低コスト化については、カルパーコーティングに比べて、鉄コーティング・ベンガラモリブデンコーティングは低コストのコーティングが可能であった。しかし、苗立ち不足や、草型の悪化等の要因によって収量が低下し、ベンガラモリブデンは収益を増やすことができず、鉄は、収量がカルパーと同程度であったため、収益増に貢献した。

広域的な圃場管理のためのリモートセンシングによる栽培技術確立のため、衛星画像解析を行うための環境整備を実施した。画像解析によって、農業試験場周辺のタンパクマップを作成した。

(6) 直播圃場で多発する新型ニカメイガの被害を減らす総合的防除技術の確立 (平成25～27年度)

有機環境部 増田周太

新規薬剤2剤および各2処理量のカルパー同時コーティングによる防除効果は、播種60日後まで無処理区に対して十分な効果がみられた。既知化合物を含む薬剤は2処理量ともフィプロニル剤(2処理量)より効果が低く、処理量が多い方が少ない方よりも効果が高かった。カルタップ剤を用いた本田防除は、同SG水溶剤が7月24日、同粒剤が7月31日の2回散布で最も効果が高かった。また、ニカメイガの越冬幼虫は11月下旬に完全に休眠することが明らかになった。冬期間の耕種防除は、11月下旬にロータリーで深耕し、その後2月末まで湛水することで、越冬幼虫の密度を大きく低減することがわかった。

(7) 化学農薬を使わずにうどんこ病を防除できるふくいオリジナル生物農薬の開発 (平成25～27年度)

有機環境部 福田明美

キュウリうどんこ病に抑制効果を示す微生物について、培養菌液の分画を作成し抑制効果を調査した。菌液および上清液では抑制効果が確認されたが、胞子液では認められなかった。この微生物を原体とした製剤試作品についてのうどんこ病防除効果を調査した。また、うどんこ病以外の病害に対する抑制効果を調査した。トマト灰色かび病に対しては、培地上では上清液添加による生育抑制がみられたが、トマト苗への噴霧処理による抑制効果は確認されなかった。トマト葉かび病、すすかび病に対しても抑制効果は認められなかった。

(8) クリムソクローバーの時期別肥効の明確化による水稻収量品質の向上技術 (平成24～26年度)

有機環境部 斉藤正志

緑肥としてクリムソクローバーを用いた美味しい米づくりに向けて、クリムソクローバーの栽培、鋤き込みおよび施肥管理法を開発し、実用化技術としてとりまとめた。

(9) 【委託研究】福井特上米の栽培技術の確立 (平成23～26年度)

作物部 笈田豊彦、中村真也

場内及び現地のこれまでの結果から、特A水準の米が味度80以上、玄米タンパク質含有率5.5～6.5%、整粒歩合70%以上は必要であることを示した。併せて、玄米タンパク質と整粒歩合の両立のためには追肥が有効な場合もあること、味度を上げるには6月移植が確実なことなど栽培改善方向を提示した。栽培改善方法を早刈りに加え、調整後短期間の冷蔵が重要なことも明らかに

した。

(10) 【提案型】若狭地域に適したアズキ栽培技術の確立（平成26年度）

作物部 高橋正樹

小浜市の水田転換圃場で、普通小豆‘エリモショウズ’および大納言小豆‘丹波大納言’を用い、通常の条間（0.7m）と狭畦（0.35m）で栽培し、作業回数、収量および品質について調査を行った。通常の条間に比べ、両品種とも狭畦栽培で50%以上の増収となり、2～3回の中耕除草作業を省略できた。子実外観について、条間に因らず、エリモショウズが優れた一方、丹波大納言は裂皮および発色不良粒が多く、若狭地域においてエリモショウズの普及が可能であると推察された。

(11) 【提案型】地域未利用資源ヒシを活用した堆肥の活用（平成25～26年度）

有機環境部 竹内早希子

ヒシの堆肥化に当たって問題となるヒシ殻は、ヒシの水分がほとんどなくなるまで乾燥させ、チョッパーシュレッダー等の粉碎機で粉碎することで解決でき、重さ換算でヒシ3、水4、米ぬか2、もみ殻1で混合し堆積、10日毎に切り返しを行うことで1ヶ月程度で堆肥化できる。

(12) 【パイロット研究】水稻のいもち病等に有効な微生物農薬の開発（平成26年度）

有機環境部 渡辺貴弘

微生物培養液の防除効果を検討するために、トマト灰色かび病、葉かび病、青枯病に対して接種試験を行った。その結果、微生物培養液処理区と微生物培養液無処理区とほぼ同等の防除価だったため、微生物培養液処理の防除効果は期待できないと考えられた。また、トマトの着果促進効果試験を実施したが、効果は認められないと考えられた。

(13) 病害虫発生予察事業（国庫）（昭和25年度～）

病害虫防除室 伊達毅ほか

県下の定点調査、巡回調査、予察灯での調査、フェロモントラップによる調査や機器による観測データをもとに、病害虫の発生を予察し、注意報、次月予報、防除だよりの情報を提供した。特殊報、警報は発表しなかった。

○水稻病害虫

水稻作付面積は26,200haで、作況指数は98、上位等級比率は約88%であった。コシヒカリの適期田植え（5月15日以降）は98%で実施され、前年同様であった。直播面積は約3,450haと前年とほぼ同じであった。

エコファーマー認定面積は24,220ha（91%）とさらに増加し、圃場整備率（88%）を上回った。

育苗期に発生する病害は、早生品種のハナエチゼンでは、育苗期間である4月の気温が低かったことから、一部の地域でピシウム菌やフザリウム菌による苗立枯病の発生がみられた。また、コシヒカリは移植時期が遅く、育苗期間である5月の気温が高かったため、苗立枯細菌病、もみ枯細菌病の発生がみられた。褐条病は前年に比べ少ない発生であった。苗いもちの発生はみられなかった。

葉いもちの全般発生開始期は平年よりやや早い6月5半旬で、7月6半旬に進展し、8月3半旬に最盛期となった。6月12～14日にBLASTAMによる葉いもち感染好適条件が広域的に出現した。それ以降は7月5～8日に広域的に感染好適条件が出現し、上位葉への感染が起こったものと考えられた。葉いもちの発生面積は420haと平年より少ない発生であった。登熟期にあたる8月は低温で曇天や雨天の日が多く、育苗箱施葉の効果も低下してくる時期になるため、上位葉で葉いもちの病斑がみられ、穂いもちへの移行がみられた。穂いもち発生面積は412haと平年より少なく、前年よりやや多い発生となった。

紋枯病は7月1半旬に初発生したが、その後の進展は緩慢で、7月上旬の発生面積は平年に比べ少なかった。8月の気温は低

かったが、降水量は多く、中晩生品種を主に急激な垂直進展がみられた。発生面積は5,639haと前年並みであった。

出穂後は高温と局地的な豪雨があったが、浸冠水した圃場もなく、白葉枯病の発生はみられなかった。

内穎褐変病、褐色米の発生は前年に比べ発生が少なかった。

本田初期害虫の発生は前年より少なかった。例年、坂井地区で発生が多いニカメイガは、移植栽培では効果の高い苗箱施薬剤の普及により減少傾向にあるが、直播栽培では、被害が増加している。第1世代の発蛾最盛期は5月6半旬で、フェロモントラップでの誘殺数は前年より多かった。発生面積は976haと前年より少なかった。直播栽培でも被害がみられ、前年に比べるとやや多い発生であった。第2世代の発蛾最盛期は7月4半旬で、発生面積は458haと前年より少なかった。発生地では、穂数不足による減収や屑米の割合が高くなる被害が多くみられた。

斑点米カメムシ類は、7月上旬の雑草地の生息密度および7月下旬の早生品種における出穂期圃場内密度は前年より多く、アサジカスミカメやアカヒゲホソミドリカスミカメの発生が目立った。冬期間の積雪が少なかったことから各地でクモヘリカメムシの発生がみられた。7月1日に注意報を発表した。斑点米は早生品種の等級落ち理由の約30%、中晩生品種では約7%で、カスミカメムシ類による頂部加害や側部シミ状の被害が多かった。斑点米カメムシ類の発生面積、斑点米の発生量は前年より少なかった。これは、7月までは気温が高く日照時間も長くカメムシ類の発育、増殖に好適な気象条件であったが、8月の低温と多雨によって、増殖が抑えられたものと考えられた。

また、イネクロカメムシは福井市西部等でも発生がみられなかった。

セジロウンカの初飛来は8月2半旬と前年より遅く、誘殺量も少なかった。トビイロウンカの発生は確認されなかった。ヒメトビウンカの発生量は前年より少なく、縞葉枯病の発生もみられなかった。ツマグロヨコバイも前年より少なく、少発生年が続いている。

イネアオムシは近年、発生が多い傾向であったが、本年は8月以降の低温、日照時間が短かったため、発生量が抑制されたものと思われる。

イネツトムシは7月の発生は多かったが、8月以降の発生は少なく前年より少ない発生となった。

○大麦・大豆・ソバの病害虫

1) 大麦

オオムギの作付面積は5,110haと前年並みであった。出穂期は4月中旬～5月上旬と前年に比べてやや遅れた。赤かび病の感染時期である5月上旬頃は気温は高かったが、降水量が少なく、感染に好適な気象条件ではなく、前年より少ない発生であった。雲形病、裸黒穂病の発生はみられなかった。株腐病、小さび病の発生も前年より少なかった。ハモグリバエ類は4月下旬にムギスジハモグリバエの発生を認めたが、極めて少ない発生であった。

2) 大豆

ダイズの作付面積は1,270haと前年よりやや増加した。これまでの主要品種であった「エンレイ」に代わり、大粒で収量性が高く、コンバイン収穫に適している「里のほほえみ」の栽培を推進し、約1,000haで栽培された。収穫期の紫斑病の発生粒率は、1%以下と前年より少なかった。県内各地でチオファネートメチルに対する耐性菌の出現が確認されているため、他の系統の薬剤による防除を指導した。茎疫病は微発生であった。べと病は7月下旬に、福井、坂井地区で発生がみられた。葉焼病は7月下旬に福井、坂井で初発生し、8月以降に発生が増加し、9月下旬に最盛期となり、前年より多く、前年並みの発生となった。

カメムシ類の圃場への侵入は7月下旬からみられたが、8月以降は圃場内の生息数は減少し、カメムシ類による被害粒率は3%で前年より少なく、前年並みであった。防除は子実肥大期以降に薬剤散布が行われた。フタスジヒメハムシは初生葉展開期の6月上旬から発生がみられた。生育期間中の発生は前年よりやや少なく、黒斑粒、腐敗粒の発生も前年より少なかった。ダイズサヤタマバエは、8月以降の低温により、前年より多い発生であった。シロイチモジマダラメイガは8月下旬から発生がみられたが、発生量は前年より少なかった。ウコンノメイガは7月中旬から発生がみられたが、8月中旬の発生量は前年並

みであった。ハスモンヨトウは8月中旬から発生がみられたが、前年に比べ8月下旬以降の発生は少なかった。丹南地区の4年連作圃場では、マメシクイガが多発生し、被害粒率は70%であった。前年の被害粒率は3%であったが、連作を続けたことによって圃場内の生息密度が急激に増加したものと思われる。

3) ソバ

ソバの作付面積は約4,500haと前年並みであった。9月以降にハスモンヨトウの発生がみられたが、前年に比べ少なかった。アブラムシ類の発生は少なく、生育不良や枯死する被害もみられなかった。

○野菜・果樹・花卉の病害虫

1) 野菜

スイカ炭疽病は7月上旬に初発生を確認した。その後の進展は緩慢で発生は少なかったが、8月上旬から降雨が続いたため、急速に進展し、8月中旬収穫の作型では、被害が発生する寸前に収穫が完了した圃場がほとんどであった。つる枯病の発生は少なかった。スイカえそ斑点病、果実汚斑細菌病の発生は認められなかった。アブラムシ類、ウリハムシ、ハダニ類は、7月下旬までの発生が多かった。

トマトの灰色かび病は半促成栽培での初発は5月下旬と遅く、その後の進展も緩慢であった抑制栽培では9月中旬に初発生し、収穫期まで続いたが発生は少なかった。半促成栽培での葉かび病の初発生は、6月下旬と遅く、7月下旬にかけ進展したものの、平年より少ない発生であった。しかし、抑制栽培では、9月に初発がみられ、収穫期まで進展がみられ、平年より多い発生となった。青枯病は、前年同様、多い発生となった。黄化葉巻病の発生はみられなかった。キュウリのべと病やうどんこ病は、半促成栽培、抑制栽培ともに、少ない発生であった。ネギのさび病は6月下旬から初発がみられ、夏も終息せず、収穫期まで発生が続いた。黒斑病は6月下旬から発生がみられ、8月の低温多雨の影響で進展し、平年より多い発生となった。葉枯病も平年より多い発生となった。害虫ではアザミウマ類、コナジラミ類の発生が多かった。施設のトマトやキュウリでは、7月の気温が高かったため、オンシツコナジラミの発生が多い圃場がみられた。抑制栽培ではタバココナジラミの発生が多く、バイオタイプQの発生もみられた。モグリバエ類の発生は平年並みであった。秋冬期のアブラナ科野菜ではコナガ、ハスモンヨトウ、モンシロチョウ等の食葉性害虫の発生は平年に比べ少なかった。ラッキョウでは、一部でネダニの多い圃場がみられた。

2) 果樹

ウメでは黒星病は、5月中旬頃から発生がみられ、6月から増加したが、平年並みの発生であった。かいよう病は4月の強風後に発生が増加し、平年並みの発生であった。灰色かび病の発生は、開花期間が短く、開花期の降雨も少なかったため、発生は少なかった。虫害では、近年増加傾向にあるモンクロシャチホコは平年より多く、コスカシバは高齢樹や特定の品種で発生が多くみられた。ウメシロカイガラムシは平年並みの発生であった。アブラムシ類の発生は平年並みであった。ウメ輪紋ウイルスについては県内の産地を調査したが確認されなかった。

ナシでは黒星病は平年並みの発生であり、6月以降に発生が目立った。ナシヒメシクイガが散見され、カメムシ類の発生は平年よりやや多い発生であった。

3) 花卉

キクの白さび病は、平年より少なく、前年よりやや多かった。

キクのアブラムシ類、アザミウマ類、ハダニ類は、5月以降の高温の影響により平年に比べ発生が多く、7月下旬まで多発生が続いた。

(14) 病害虫防除所運営事業(国庫)(昭和26年度～)

病害虫発生予察の精度を高め、効率的な防除を推進するために、40名の病害虫防除員を設置し、いもち病、紋枯病、カメムシ類、ウンカ類の発生状況調査を行った。定点に病害虫防除掲示板を設置し、情報を提供した。また、農薬販売業者について指導、

取締りを行った。

(15) 農薬抵抗性検定事業 (国庫) (昭和55年度～)

ア イネいもち病菌の薬剤感受性検定 (国・県) (平成26年度)

有機環境部 渡辺 貴弘

イネに発生するいもち病菌191菌株について、ストロビルリン系殺菌剤に対する薬剤感受性について遺伝子診断法により調査した。その結果、分離された191菌株はすべて感受性菌であった。

イ ニカメイガの薬剤感受性検定 (国・県) (平成25年度)

有機環境部 増田周太

県内の施設トマトに発生するタバコナジラミについて薬剤感受性検定を行った。ピリフルキナゾン剤、レピメクチン剤は、72時間後の死虫率が90%以上となり、感受性の低下は認められなかった。イミダクロプリド剤については、同死虫率が50%となり、低い感受性を示した。

ウ 減農薬防除体系実証事業 (国・県) (平成25～27年度)

有機環境部 渡辺 貴弘

オオムギ跡ソバ隣接水稲圃場において、着色米の発生を抑えるために、圃場管理 (水管理) によって着色米の発生低減を検討した。出穂期以降に慣行区に対して入水回数を約2倍にした水管理区は慣行区に比べて、少発生下ではあるが、わずかに着色米の割合が低下する効果が見られた。

(16) 重要病害虫等侵入警戒調査事業 (国・県) (平成26年度～)

ア チチュウカイミバエ

福井市、あわら市、勝山市、越前市、若狭町の5ヶ所に誘引トラップを設置し、4月～10月に調査を行った。調査期間中にチチュウカイミバエの誘殺は認められなかった。

イ スイカ果実汚斑細菌病

平成26年4月23日に7カ所、5月22日に7カ所、6月25日に7カ所、7月4日に4カ所、7月22日に5カ所のスイカについて目視で症状の有無を調査した結果、本病は確認されなかった。

ウ ウメ輪紋ウイルス

平成26年5月20日～28日に、20園地のウメについて目視で症状の有無を調査するとともに、採取した試料を検査した結果、本病は確認されなかった。

エ キウイフルーツかいよう病 (Psa3系統)

平成26年5月に愛媛県で国内最初の発生が確認され、これまで7県で発生が確認されたため、緊急全国調査が実施された。このため、平成26年11月26日に7園地において目視で症状の有無を確認した結果、本病は確認されなかった。

(17) 土壌保全対策費 (土壌環境基礎調査事業) (昭和54年度～)

有機環境部 西浦愛子 斉藤正志

土壌機能実態モニタリング調査事業：県下農地25地点で土壌の断面調査および理化学分析を行い、昭和の終わり頃からの土壌の変化を把握した。稲わら連用が土壌および水稲に及ぼす影響：化学肥料単用区、無窒素区、有機物施用区、総合改善区でコシヒカリの生育・収量調査を行った。稲わら鋤き込みを行っている有機物施用区と総合改善区は、草丈が高めに推移し、成熟期に

かけて大きく倒伏したため千粒重が低下し、減収につながった。有機質資源施用基準の策定調査：畑ライシメーターを用い、牛ふん堆肥、汚泥肥料の化学肥料代替の可能性をスイートコーン-ダイコン作付け体系で検討した。

(18) 肥料検査登録事業 (昭和51年度～)

有機環境部 竹内早希子

肥料取締法(昭和25年法律第127号)に基づき、県に登録申請している特殊肥料の取去を実施し、肥料成分等成分分析を行っている。本年は食品残渣を主原料にした肥料について、1件の取去を実施した。

(19) 試験研究課題化・評価システム事業 (経営・マーケティング調査) (平成25年度～)

企画・指導部 渡辺和夫

課題ごとに流通・消費動向やマーケティング、先進事例調査を行なった。さらに5品目・6経営体(特栽水稻2経営体、ブドウ・キク・ウメ・サトイモ各1経営体)の経営分析を行ない、課題ごとの経営モデル作成のための基礎データを収集した。

(20) 「ポストこしひかり」有利販売調査事業 (平成26年度～)

企画・指導部 渡辺和夫

首都圏における消費者、米穀店、料理人等の多様な層から、アンケートや直接訪問による聞き取りにより米に関するニーズ調査を実施した。調査結果

・消費者対象アンケート調査 2回 ・米穀店へ聞き取り 3店 ・料理人等へ聞き取り 6店

(21) 奨励品種決定調査事業 (昭和39年度～)

・ポストコシヒカリ開発部 田野井 真

本県に適する優良品種を選定するため、粳米早生3系統を本試験に供試した。そのなかから、県下6ヶ所の現地において地域性も考慮して早生2系統(越南241号、越南249号)を配付して検討した。また予備調査には9系統を供試した。

本試験および現地調査の結果、各系統ともハナエチゼンと同等の味度値、外観品質を有していたが、収量はハナエチゼンより劣っていた。越南239号、越南241号は基本調査3年を経過したため本年度にて調査を終了、越南249号は次年度も継続して試験することとなった。予備試験の極早生系統越南252号は品質、収量、味度値が高かった。

・作物部 笈田豊彦、高橋 正樹

大麦は、食用として基本調査8系統および主に加工用として予備調査3系統を供試し、食用で東山裸112号および四国裸129号ならびに加工用で東山皮糯109号を有望とした。

小麦は、国産麦の供給が不足する強力・超強力小麦系統5系統を供試し、東北225号(超強力 播性IV)およびゆめかおり(強力 播性II)を有望とした。東北225号について、実肥試験を行い、実肥6gN/m²(尿素)で子実タンパクを12%以上にできることを確認した。東北225号は、平成26年9月18日、品種登録された。品種名は「こしちから」。

大豆は基本調査11系統および予備調査11系統を、5月27日および6月9日の2播種期で検討し、作系115号を有望とした。

夏ソバは、夏型で穂発芽性「難」の「九州7号」を供試し、キタワセソバ(標準)並みの収量が得られたことから、有望とした。

(22) 原原種・原種ほ設置事業 (昭和38年度～)

作物部 吉川 嘉一

水稻・大麦・大豆の系統維持および原原種生産のために採種を行った。水稻はコシヒカリなど8品種の原種や系統を栽培し、

原種13,492kg、原原種235.1kgを生産した。大麦はファイバースノウの原原種や原・原々種を栽培し、原原種825kg、原・原々種31kgを生産した。大豆は里のほほえみなど2品種の原原種や原・原々種を栽培し、原原種648kg（大粒・手選別前）、里のほほえみの原・原々種28kgを生産した。

（23）優良種子生産体制確立（昭和38年度～）

作物部 吉川 嘉一

水稲・大麦・大豆の優良種子生産に向けて、水稲においては原種、大麦・大豆においては原原種の発芽率を調査した。水稲原種では発芽勢（28～91%）、発芽率（96～99%）、大麦原原種は発芽率（93%）、大豆原原種は発芽率（94～97%）であり、いずれも、福井県での種子審査基準と農産物検査での種子基準を満たしていた。

（24）キヌア栽培技術の開発（平成24年度～）

作物部 笈田豊彦

ネット通販なども利用して収集した13種から発芽試験により多少なりとも出芽が期待できた5種を、8月5日および9月2日に50cm条間で200粒/m²播種した。9月播種は全般に比較的出芽が良く、生育も旺盛だったが成熟が遅くて4種は収穫に到らなかった中で、NL-6だけは早生で、10a換算110kgの子実が収穫できた。

（25）ソバの血圧低下作用効果の解明と加工技術の開発

作物部 高橋 正樹

福井県ソバ在来系統の‘大野在来’、‘丸岡在来’および‘美山南宮地在来’ならびに種皮が緑色を呈する‘長野S8号’、春播きもでき、穂発芽性‘難’の‘春のいぶき’を供試した。収量は、長野S8号が141kg/10aと最も高く、大野在来が138kg/10a、美山南宮地在来が137kg/10aと高かった。丸岡在来は、千粒重が小さいため、117kg/10aと低かった。また、春のいぶきの収量が123kg/10aだったほか、成熟期が10月10日と、中間型の南宮地在来に比べて6日早いことが判った。

（26）農地土壌温室効果ガス排出量算定基礎事業（平成20年度～）

有機環境部 西浦愛子

県内20定点（水田18地点、普通畑2地点）で土壌をサンプリングし炭素窒素量の分析を行った。各土壌群における0-30cmの平均土壌炭素量は、普通畑の砂丘未熟土を除き20～80t/haであった。また、農業試験場内の基準点（水田）において同一の調査を行った。0-30cmの炭素窒素量は共に、化学肥料単用区よりも有機物施用区の方が多かった。

2) 園芸研究センター

（1）スペシャルミディトマトの新品種育成（平成25～31年度）

野菜研究グループ 西端善丸・加藤里佳

・親品種の作成 前年度において、農業試験場で所有する固定品種と市販品種との交雑から得られた雑種について、有望と見られる株から後代種子を得た（F2種子）。本年度は春作と秋作において、これらのF2種子を栽培し、有望な形質の株を選抜し、固定化を進めた（F2→F4）。

（2）直売・観光で売れるイチジクとブドウの品種選抜と、イチジクの長期どり作型の開発（平成25～28年度）

ウメ・果樹研究グループ 三輪直邦・吉田貴寿

①一文字整枝を活かした樹体の部分暖房技術の開発

一文字整枝にするために2本の主枝を誘引育成した。

②バッグ栽培による効果的根域暖房と連作障害対策

2樹/バッグ区で葉長、茎径が最も大きくなり、収穫果数、収量も多かった。しかし、1バッグあたりの収量では密植した8樹/バッグが最も大きかった。

根域加温により、収量・収穫果数が多くなった。また、加温区では収穫のピークが1ヶ月半以上早まり、長期に収穫することができた。

③本県の気象・栽培様式に適するイチジクとブドウの品種選抜のため、開花期等の生育特性の把握、果実品質調査を行った。

収穫できたブドウの品種について食味試験を行ったところ、しまねスイート等の評価が高かった。

(3) 県民と先端技術で作る、ふくいオリジナルキクの開発 (マイクロマム) (平成25～28年度)

花き研究グループ 篠山治恵

福井県の気候に合い、お盆や彼岸などに計画出荷しやすい品種や新しい需要創出につながる品種など、ふくいオリジナルキクを育成するため、県内外から有望品種・系統の収集を行い、交雑親和性の確認およびF1雑種種子の獲得を行った。小ギクタイプについては、F1雑種約3,500系統を圃場で栽培し、草丈、日持ち性等について約1,000系統を選抜した。輪ギク品種については、5品種について交雑親和性の検定を行い、F1雑種種子を獲得した。スプレーギクタイプについては、F1雑種約1,300系統をハウスで栽培し、日持ち性と花房型について約500系統を選抜した。ポプリタイプについては、雑種約100系統をハウスにて栽培し、香りの強い14系統を選抜し、自殖性野生ギクを戻し交雑した。

さらに既出の耐病性・耐虫性の遺伝子組換えキクの実用化のための完全不稔化においては、配偶子形成に関わる遺伝子を単離し、ゲノム編集用の配列を特定し、TALEN配列を合成し、遺伝子導入用のパイナリーベクターに構築し、*Agrobacterium*を介してキクへ導入した。

(4) スマートアグリ技術の開発 (ミディトマト・パプリカ・夏イチゴ) (平成26～29年度)

スマート園芸研究グループ 森永 一、岩本 祐佳、桜田 真一

ミディトマトについて、8月上旬定植、簡易バッグ栽培の作型で、寡日照条件下での補光について、収量等の調査を行った。その結果、11月上旬からの日の出前2時間～日の出までのLEDの樹間補光により、可販収量は20%弱、無処理区より多くなった。

夏イチゴに関しては、福井県に適した品種を選抜するため、20品種を栽培し、生育、収量調査を行った。収量性、耐暑性などから四季成りイチゴ3品種、一季成りイチゴ2品種を有望品種として選抜した。四季成りイチゴを用いることで、花芽分化処理を行うことなく初夏から秋まで収穫が可能であった。

パプリカに関しては、福井県に適した品種を選抜するため、3品種を栽培し、生育、収量調査を行った。収量性、耐暑性などから1品種が有望であった。

(5) 農業電化協会委託試験 (平成26年度)

スマート園芸研究グループ 桜田真一

閉鎖型育苗装置において、人工光を利用したパプリカ苗の育苗試験を実施し、光源および光量子束密度が育苗期の苗の生育に及ぼす影響を検討した。

(6) 省エネ・低コストでいつでも作れる施設野菜の技術開発 (平成24～26年度)

ミディトマトの8月上旬定植、簡易バック栽培の作型で、地下水熱利用型ヒートポンプを用い、夏季の夜間冷房、および冬季の変温管理（暖房）が収量等に及ぼす影響を調査した。その結果、22時～翌4時の20℃～6時間冷房で、果実数、平均果重の増加により、無冷房区と比較して20%強、可販収量は向上した。また、冬季の変温管理については、慣行区（9～15時：16℃、15時～翌9時12℃設定）より、3段階変温（前夜半14℃設定）と4段階変温（早朝2時間14℃設定+前夜半加温）により、可販収量は12～15%向上した。

また、同じバック栽培において、給液量・施肥窒素量を一定にし、給液開始時間・給液時間を変えた場合に、収量等に及ぼす影響について調査を行った。その結果、比較的気温が高い時期（10～11月）は区間の差が明確でなかったが、気温が急激に低下した12月以降は、日の出2時間後から給液を開始し、給液時間を短く（給液回数を多く）する方が、日の出直後給液開始+給液時間は長めの区より、可販収量は20%程度向上した。ただ、収量等のデータは2月末までのデータであることに留意する必要があると考えられた。

（7）作業性の高い水田転換ウメ園の増収技術の確立（平成22～26年度）

ウメ・果樹研究グループ 神田美奈子

①排水不良園における樹勢強化技術の確立

溝の設置により排水性を改善した水田転換園におけるウメの収量は、畑地と比較して差はなかった。溝に充填した資材は、腐熟により粗殻が、地表から20cm程度沈降したが、カキ殻、砕石、パーライトはほとんど沈降しなかった。

②乾燥ストレスを軽減するための灌水方法の確立

タイバックシートで干ばつ条件を再現したが、夏以降の天候不順により、干ばつ処理が再現できず、結果は判然としなかった。ライシメーターにおいて、干ばつや地下水位の高い状態を再現した。地下水位30cmおよび干ばつ区で光合成量、気孔開度が劣った。

③現場で出来る施肥量診断技術の確立

現地ほ場の葉色値は8～9月に最も高くなったが、葉中窒素含有率は5月に最も高く、月日が経過するにつれて低くなり、葉色値の変化とは異なった。5～9月までの全ての試料の葉色値と葉中窒素含有率の相関係数は-0.293となり、相関はみられなかったが、月ごとにプロットすると高い相関が得られた。30～60cmの新梢の中位葉の葉面積は、6月で大きさはほぼ決まると考えられた。葉中窒素含有率が健全樹と同程度でも、衰弱樹では葉面積が小さくなるほ場があった。

（8）ウメ多収性品種‘福太夫’‘新平太夫’の特性を生かした安定生産技術の開発（平成25～27年度）

ウメ・果樹研究グループ 猿橋由恵・吉田貴寿

①‘福太夫’の果実肥大促進および黄化抑制技術の開発

4月下旬の摘果が大玉化に最も効果が高く、収量は変わらなかった。

新梢管理により、樹冠内部が明るく保たれ、完熟落果時期が3日早くなった。また、新梢管理することにより結果枝が太くなり、花芽密度が多くなった。

果実の黄化とクロロフィルの減少に相関が見られた。

②加工専用品種‘新平太夫’の超省力完熟梅収穫技術

平坦地では傾斜をつけてネットを設置することで、収穫作業効率が慣行の1.3～3.6倍になり、作業強度も軽減できた。果実の軽度なすり傷は慣行より多くなったものの、ケシキスイの食入率は慣行より少なかった。

③白干梅の高品質生産技術の開発

LEDライトを用いて370nm・2.28mW/cm²の紫外線を16～24時間照射すると、天日干しと同様の外観になった。また、35℃で32

時間または40℃で23時間の通風乾燥で干し上がり水分65%になった。

(9) 水田を活用した省力果樹生産技術の開発(ミカン) (平成25～26年度)

ウメ・果樹研究グループ 神田美奈子

①高畝栽培技術の確立

秋季の降雨後に土壌水分量を測定し、高畝による土壌水分低下を確認した。秋～冬季に尿素散布、調査を行ったが、散布直後のため、効果は判然とせず、春季以降の植物体の反応を再確認する。

②防寒対策の省力化

冬季にミカン幼木を防風ネット、新聞紙+防風ネットで包み、対照区として何も包まない無処理区を設置した。新聞紙+防風ネットが防風ネットのみ、無処理区よりも葉の傷みが少なかった。

(10) 水田を活用した省力果樹生産技術の開発(モモ・スモモ) (平成25～29年度)

ウメ・果樹研究グループ 窪田博之

①土壌条件に左右されないポット栽培技術の確立

モモとスモモの不織布ポットにおける大苗育苗の最適条件を明らかにするため、土壌容量を20L、40L、60Lに設定し、主幹径の増加率、新梢伸長量、乾物重量の生育量を調査したところ、60L、40Lに比べ、20Lで主幹径の増加が小さいことが明らかとなった。また、主枝、主幹、根の乾物重の割合は、土壌容量60L、40Lに比べ、20Lは根の割合が高い傾向がみられた。

②ウメ花粉を利用したスモモ受粉技術の確立

ウメ花粉によるスモモの結実性を明らかにするため、紅サシ、新平太夫、福太夫の花粉の発芽率を調査したところ、福太夫、新平太夫、紅サシの順で高い傾向がみられた。一方、これらの3品種をスモモ‘ハニーローザ’へ受粉させ、結実率を調査したところ、福太夫、紅サシ、新平太夫の順で高かった。これらのことから、福太夫はスモモへの受粉に適していることが示唆された。

(11) 簡単に組み立てるホームユース切り花栽培技術の開発(平成25～27年度)

花き研究グループ 頼本英明

春植え夏秋キク栽培におけるコギクの5本仕立て栽培では、5本全てを仕立てることは困難であったが、品種により4本程度確保されること、また、特に切花重、莖径等のボリュームは3本仕立て栽培に比べ劣るものの、求める切花品質にもよるが3本仕立て栽培に比べ極端に切花品質が悪くなることはなく、生育期間が長くなるにつれ切花長、切花重は増加していくことが明らかとなった。また、4月中旬、下旬と定植時期の違いについて検討したところ、芽立ち本数に違いはなかったが、下旬定植で、切花長が短くなるとともに、節数が少なくなった。栄養生長期が短くなるためと思われた。福井ユリ‘リリブライトレッド’について球根への低温処理が開花に及ぼす影響について検討を行った。10℃で冷蔵処理した球根を10月上旬に定植し、冬期間に5℃を目標に加温することにより開花が明らかに早くなり、冬から春にかけて採花できる可能性があると思われた。

(12) <予備試験>新品種開発(ブドウ) (平成26年度)

ウメ・果樹研究グループ 三輪直邦

新しくブドウの新品種育成に取り組むため、除雄や交配の効率的な作業手順等を検討した。交配に用いる樹の育成および圃場整備を図った。

(13) <提案型共同研究>効果的な高温対策によるハウスブドウの品質向上 (平成26年度)

ウメ・果樹研究グループ 三輪直邦

ブドウハウスの屋根部への遮光剤の塗布は、ハウス内の気温を5℃程度低下させることが明らかとなった。遮光率25%程度の寒冷紗で樹冠を被覆することにより、果実品質を下げることなく葉やけ症状を軽減できた。樹冠下にマルチを敷設することで、地温は5℃程度低下した。

(14) 伝統地場農産物原種供給事業 (平成14年度～)

花き研究グループ 早川嘉孝

「吉川ナス」の採種を行った。また、現地から本来の形質のカブラの種子を供給してほしいという要請のある「古田苺カブラ」、
「山内カブラ」、「杉箸赤カンパ」は現地において形質の調査および生産者との検討を行い、優良個体選抜をした。「古田苺カブラ」、「山内カブラ」については選抜2年目、「杉箸赤カンパ」は選抜初年目である。
農業試験場で育成したメロンの品種「ハープレディ母親系統」の採種を行った。
本年度は、「立石ナス」、「古田苺カブラ」、「嵐カブラ」の種子を現地へ供給した。

(15) くだもの産地育成事業 (平成23～27年度)

ウメ・果樹研究グループ 三輪直邦

観光園に適したブドウ高品質果実安定生産技術の確立するため、光量子センサーを用いた樹相診断技術および蒸散量に基づく灌水技術を検討した。枝葉の茂り具合が異なる樹相について相対光量子束密度を測定した結果、4月で82～97%、7月で8～45%となり、房重・糖度は枝葉が混んでいるところで低い傾向であった。ブドウ樹(60Lポット植え)の蒸散量の季節的な変化を樹体重量測定で調査した結果、夏季の晴天日では、20L程度の蒸散があった。

(16) 果樹の新優良品種選定

ウメ・果樹研究グループ 三輪直邦・吉田貴寿

①ナシ第8回系統適応性検定試験

果樹研究所育成の「筑波57号」と対照品種の「幸水」、「豊水」を供試した。樹齢8年生生育特性、果実品質等を調査し、本県での栽培適応性について検討した。

②カキ第7回系統適応性検定試験

果樹研究所育成の「安芸津22、24号」と対照品種の「富有」、「松本早生富有」を供試した。高接6年生の生育特性、果実品質等を調査し、本県での栽培適応性について検討した。

③ウメ第3回系統適応性検定試験

果樹研究所育成の「筑波11, 12, 13, 14, 15号」と和歌山県育成の「和歌山1, 2, 3号」、対照品種の「南高」、「白加賀」を供試した。生育特性、果実品質等を調査し、本県での栽培適応性について検討した。

④スモモ第2回系統適応性検定試験

果樹研究所育成の「筑波6, 7号」、対照品種の「ソルダム」を供試した。樹齢6年生の生育特性、果実品質等を調査し、本県での栽培適応性について検討した。

(17) いきいき里山特産品育成事業 (平成26～28年度)

野菜研究グループ 岡本博次

薬用作物11品目を栽培し、生育調査、生存率、収穫調査を実施した結果、春品目で有望なのは、2品目であった。現在、成分分

析中。秋品目7品目は、10月～11月に定植し、今後、生存率、生育調査、収穫調査、成分分析を行い、本県での推進すべき品目を明らかにする。

(18) <予備試験>伝統野菜を利用した商品開発(平成26年度)

野菜研究グループ 加藤里佳

福井の伝統野菜4品目(杉箸アカカンバ・マナ・勝山ミズナ・木田チリメンジソ)を栽培し、食味や機能性成分を調査した。今後、これらの結果をもとに商品開発に向けて協議する予定。

3. 普及指導業務実績

(1) 県全域の普及指導活動の支援(高野 隆志)

① 普及指導計画の進捗状況および評価への助言

本年度は「ふくい農業基本計画」の初年度であり、普及指導活動方針に基づき作成した普及指導計画の初年度にあたることから、施策目標の達成に必要な事項を年度計画に盛りこむとともに、特徴ある農業経営支援部課の普及活動が行われるよう普及指導計画中間検討会、実績検討会、次年度計画検討会を通し助言にあたった。

また、平成27年度の普及指導計画の作成にあたっては、県庁関係各課や農業経営支援部課から意見・改善・要望等をいただき、「平成27年度福井県普及活動方針」および「平成27年度普及指導計画作成・進行管理・評価等要領」の作成にあたった。

2月17日(火)には普及指導活動外部評価委員会を開催し、農業経営支援部課および高度営農支援課から計7課題を説明し、県立大学の北川教授他4名の委員から評価を受けるとともに貴重な意見をいただいた。

② 普及指導員の資質向上

普及指導活動で直面する課題解決について、普及指導員の資質向上と普及活動の効率化を図るため、第1回普及指導員研修会として、5月29日(木)に福井県協ビルで「集落営農の広域組織化への意義・展開方向と豊かな地域づくり」と題して一般社団法人 J C総研基礎研究部 主任研究員の小林元氏から講演を頂いた。この講演の中で、本県の重要施策である集落のメガファーム化について、全国の先進県で行われている大規模な集落営農組織再編の方向性・方法等について貴重な助言をいただいた。

12月19日(金)には、NOSA I福井で第2回普及指導員研修会を開催した。研修会の前半は、本県の重要施策である集落園芸の推進について、全農富山県本部 営農販売部 TAC営農対策課の横井正幸氏を講師に招き「全農とやま広域野菜選別調整施設を核とした園芸振興について」と題して、本県と気象・土壌・集落組織等の条件がほぼ似通った富山県において、水田園芸を積極的に進め成果を上げられている事例について報告をいただき、本県に必要な農業者の意識付け、推進方策、指導者間の連携等について助言をいただいた。研修の後半は、「集落園芸推進に向けての普及指導活動のポイントについて」をテーマに、パネルディスカッション形式で次年度の園芸推進方策について検討を深めた。

1月23日(金)に、石川県庁で平成26年度北陸ブロック現地活動調査研究会が開催された。この調査研究会は、北陸4県の先進的な普及活動の成果について相互に交換し、その手法を研究するために行われており、本県からは13名の普及指導員を派遣した。

1月28日(水)には、国際交流会館で普及指導活動成果発表会を開催した。普及活動の事例発表では、高度営農支援課を含む農業経営支援部課から7事例の成果が発表された。最優秀賞の事例は、次年度の9月24~25日に東京の国立リハビリテーションセンターで開催予定の第3回農業普及活動高度化発表会への県代表候補とし、優秀賞の事例は次年度の1月29日に福井県で開催予定の北陸ブロック普及活動調査研究会の県代表候補とした。

普及組織への新規採用者1名および新規転任者1名に対して、新任者研修(5月13～15日)を実施し、本県の農業の現状と課題について専門ごとの講習に加え、普及手法の基礎を研修するとともに、農試、園試、畜試へ6日間の農業体験研修を実施した。

農林水産省派遣研修には26名、国内先進地派遣研修に5名を参加させ、県内での各専門研修を多数開催した。

普及指導員受験対象者に対し、資格取得を目指して研修会(6月16日、7月18日)を開催し、業績報告書および課題イ・ウを中心に添削指導を実施した。その結果、2名の受験者が合格した。

③ プロ農業者育成の支援

地域農業の担い手を対象として農業経営の改善方向を助言するため、経営指導委員会(生産振興課、JA中央会、ふくい農林水産支援センター、農業会議、農業試験場)と連携して、「新たな農業経営指標」の評価結果(H25)に基づく福井県の指標値づくりの検討や、経営の規模拡大・法人化を図る農業者や組織育成への研修会を支援した。

(2) コシヒカリ特A技術の普及拡大(倉田 源一郎)

① 特A技術の確立と普及

県内28カ所に特A技術普及実証圃(技術解決モデル圃2カ所含む)を設置し、過去3年間の調査結果に基づきまとめた特A技術指導指針の技術を実証した。

その結果、28カ所の特A技術普及実証圃のうち6カ所(技術解決モデル圃1カ所含む)で特Aレベルの穀検食味評価を得た。

平成26年産米の食味ランキングでは、本県産コシヒカリが3年連続で特Aを獲得した。

② 特A評価定着のための基本技術指導

県内15カ所で土づくり実証圃を設置し、ケイ酸等入り基肥一発肥料等の試験を実施した。このうち2/3で増収などの施用効果をえた。土づくりを効果的に推進するため、3,030カ所の土壌分析を実施した。

五月半ばの適期田植えに続き秋の田起こし運動を推進し、その実施率は73%だった。

タンパク低減、カメムシ防除等について稲作情報を27回発信した。

これらの対策の結果、県全体のうるち米1等比率は88%、コシヒカリのタンパク含量は6.3%と目標を達成した。

(3) 水稲エコ農業栽培技術の確立(倉田 源一郎)

① 地域に適した特別栽培技術の確立

坂井市坂井町福島に技術解決モデル圃を設置し、ボカシ肥料等施用による食味向上効果を検証した。慣行施肥に比べ味度値や穀検食味評価が高かった。

展示圃試験においてコシヒカリ特別栽培用基肥一発肥料を試験し、慣行施肥と同等の生育と収量・品質を得た。ただ、肥料の単価は5割ほど高くなることが予想された。

今年度の特別栽培の取組結果を踏まえ、ポストこしひかりの特別栽培確立に関する研究を体系づけた計画を作成した。

② 有機農業ネットワークとの連携強化

有機農業ネットワークと連携し、6/10水田除草機実演会、8/7有機栽培研究中間検討会、2/11有機栽培技術研修会を開催した。

また、消費者との交流活動を支援するため、ふくい味の祭典出展について支援した。

(4) 大豆「里のほほえみ」生産・利用拡大支援(倉田 源一郎)

① 里のほほえみの生産性向上

国事業を活用し里のほほえみ技術実証圃を6カ所設置し、簡易地下灌漑や窒素深層施肥等の実証を行った。技術解決モデル圃では特別栽培を実施している集落営農法人に対し、施肥コストを削減できる有機肥料を実証した。

② 県産大豆の利用提案および付加価値向上支援

県産大豆の県内流通拡大を図るため、7/30県産大豆生産利用拡大現地検討会、3/11里のほほえみ利用拡大検討会を開催した。県内利用拡大に向け、県内の大豆需要量把握、大豆生産の情報伝達の仕組みづくり、県産大豆使用食品の理解促進等、新たな課題を掘り出せた。

(5) メガファーム育成による農地の集積・集約化 (倉田 源一郎)

① 推進対象の選定と計画策定

技術解決チームを設置し、推進候補地の選定と課題整理を行い、単一組織設立型6、二階建て型8、広域作業受託型4、計18の推進候補地を整理した。

② メガファーム育成推進

広域組織事例紹介、組織設立手順提示、生産費縮減提示、大規模経営（メガファーム化）研修会開催により各地区の育成推進活動を支援した。岡保地区のメガファーム育成効果、検討の進め方、構想案を作成したことで、岡保地区や他の地区の推進活動を後押しできた。

以上の活動の結果、福井（メガファーム鶉）、坂井（田川農産）、丹南（ファーム東陽）の3組織を育成できた。

(6) 競争力のある農産物づくり戦略 (山口 秀武)

① 本年度重点を置いた活動

本県農業の基幹作物である水稻生産額の低下にともない、園芸品目導入による生産額拡大が課題となっている。特に、水田地帯への野菜導入による稲作との複合経営の定着化、経営の確立が急務となってきている。そこで、近年水田園芸品目として作付が増えているネギの安定栽培、さらに、加工・業務用野菜として注目されているキャベツの契約栽培について収量品質向上対策について技術解決チーム会の中で検討した。また、福井ブランドである「越のルビー」について、近年課題となっている猛暑時の草勢低下に伴う収量・品質低下の課題解決のため技術解決チーム会で検討した。

② ネギ技術解決チーム会の開催 (チーム員 18 名)

県内でのネギ作付面積が60haとなり、水田園芸の主力品目の一つとなってきた。生産拡大に伴い、年間を通じての生産出荷が求められている。この中で猛暑時の生育停滞、連作による病害の発生、降雪による品質低下が問題となっている。これらのことを改善するため、技術解決チーム会として活動を行った。

【主要な結果】

品種比較試験から有望品種に選出した品種は、福井、坂井地区ではさび病に強く、降雪に強く葉折れが少ない「龍ひかり」であった。奥越、若狭地区ではさび病に強く葉色が濃い「夏扇4号」であった。二州地区では茎が太くサビ病も少ない「関羽」となった。これら、選定した品種について、再度現地試験を行う。

栽培マニュアルとして、「越冬ネギ栽培」「病虫害防除体系」を追加する。

○平成26年度出荷量 (経済連調べ)

ネギ出荷実績 1,073t (前年 1,106t)

③ 加工・業務用キャベツ技術解決チーム会の開催 (チーム員 13 名)

集落営農組織等が、水稻複合経営としてキャベツ栽培を導入する場合の課題、特に収量・品質向上対策について技術解決チーム会として取り組み活動した。

【主要な結果】

現在、加工・業務用品種として「おきな」が栽培されているが、収穫遅れや11月以降の降霰で裂球しやすく収量低下の要因の一つになっている。そこで、収穫遅れや降霰に遭遇しても裂球しない品種について品種

比較試験した結果、「冬のぼり」がほとんど裂球せず有望品種として確認できた。なお、「おきな」を超えた優れた品種については今回確認できなかった。一括肥料の利用については、今回の試験では期待できる結果は得られなかった。なお、一括肥料でも追肥が必要となる結果もあるため、窒素肥料の単肥による施肥について施用方法、施用量を検討する必要がある。

○平成 26 年度出荷量（経済連調べ）

出荷実績(加工・業務用)176t（前年 79t）

④ ミディトマト技術解決チーム会の開催（チーム員 13 名）

ミディトマトの品種「華小町」の抑制栽培の収量が取れていない。その原因として、真夏の着果不良、段飛び、生育後期の草勢の低下と収穫終期が早まっていることが上げられる。そこで、台木による草勢維持について試験を行う。また、栽培モデル別の経営調査についても技術解決チーム会として取り組み活動した。

【主要な結果】

抑制栽培の真夏の生育不良、草勢低下防止として台木試験を実施した。供試品種「スパイク 23」について、今年度は、8 月が寡日照であったため高温時の草勢確保、生育維持については判然としなかった。また、経営モデル調査については、本年度 3 経営体を予備的に調査したこともあり、引き続き次年度も実施していく。また、越のルビー振興委員会を設立した(6 月)。今後、「越のルビー」ブラン化や振興方策について委員会の中で検討が行われる。

○平成 26 年度出荷量（経済連調べ）

販売実績 158t（前年 116t）

⑤ 大規模な水田園芸取り組み支援

水田活用大規模園芸事業は、3ヵ年(H23~25)で15経営体が認定され、実践圃として普及指導員が技術支援を行ってきた。いずれの計画も、5年後には販売額1,000万円以上の達成が目標として掲げられている。目標達成に近い経営体もあれば、これからの経営体もある。計画どおりにいかなかった経営体については、栽培技術の確認とあわせ作業工程、人員の配置や人の動きなども含め検討が必要である。今後、地区プロジェクトチーム会の中で引き続き検討していく。

(7) 6次産業の推進および県産大豆の付加価値向上支援（榎本 千鶴）

① 6次産業化に取り組む農業者の課題整理

6次産業化に取り組む農業者の問題点や課題は個々に多様であるため、それに応じた支援策等の整理が十分出来ていない。また、6次産業化サポートセンターが26年度から新たに食品加工研究所に設置されたことから、支援情報の円滑な引き継ぎおよび新たな支援体制の整備が急がれている。更に、消費者の食に対する安全・安心意識が高まりつつある中で、そのニーズに対応し更なる消費者の信頼を獲得し、販路拡大を目指すためには、6次産業化に取り組む農業者の製品管理意欲の向上に取り組む必要があることから、以下のとおり活動支援した。

ア 重点支援対象者の選定

重点支援対象者については組織・個別経営体支援計画に位置づけて支援していくことを確認し、それぞれに応じた支援体制の検討および支援効果の検証を行った。

イ 6次産業化サポートセンターとの連携

食品加工研究所にサポートセンターが新設されるにあたり、過去の経緯と現状について情報提供並びに打合せを行った。その後も定期的に情報共有を図った。

ウ 新たに6次産業化に取り組む意欲のある農業者の掘り起し

7/11 に若手女性農業者を対象とした研修会を実施し7名が参加した。大変好評で、同世代で同じ立場の女性同士が情報交換できる場を切望する声が上がった。

7/31 に農家レストラン運営および惣菜開発に係る研修会を開催した。既に6次産業化活動に取り組んでいる農業者を中心

に全 34 名が参加した。

11/28 に山形ガールズ農場代表の高橋菜穂子氏を招き講演会および情報交換会を開催した。50 名が参加し、その内 22 名が情報交換会に参加した。その後、若手女性農業者による自主的なネットワークづくりへと発展した。

エ 6 次産業化に係る指導資料の作成

『6 次産業化相談カード』を作成、各担当に例示した。

6 次化指導に役立てる為に、11/7（富山県における 6 次産業化先進事例調査）および 12/12（商標等知財の活用について）に専門研修を実施した。

② 6 次産業化に取り組む農業者の製品管理等技術向上による販路拡大支援

ア F C P の活用により製品管理に取り組むモデル経営体の育成支援

丹生の担当普及指導員と相談した上で、越前町の寺坂氏をモデル経営体に選定し、F C P 活用支援を行った。寺坂氏の製品品質管理意欲は高く、作成した商談シート（12 商品分）を積極的に商談の場で活用するようになった。また、丹南の女性起業組織や福井の女性農業者においても、商談シートの作成・活用が進むようになった。

③ 県産大豆の利用提案および付加価値向上支援

ア 新たな加工品開発支援および技術指導

加工関係の技術解決チーム活動を通じて、里のほほえみを使った加工品の試作に取り組む起業組織（6 次産業化事業体）を選定し、支援を行った。3 起業組織が、里のほほえみの外観品質の良さを訴求出来る加工品（納豆、煮豆、水煮）の試作に取り組んだ結果、概ね商品化の目途が立った。この他、フク醤油による里のほほえみ（+大麦）を使ったしょうゆの試作検討にあたり食品加工研究所と協力して情報提供を行った。商品設計は完了し、商品化に向けて J A 福井市と協議中である。

イ 加工品の求評および試験販売

4 月から毎月『福井の大豆な会』の月例会に出席し、活動支援および県産大豆に係る情報提供を随時行ってきた。8 月には、大豆な会会員の商品をコラボ&アレンジした料理 1 2 品の試作を実施し、それを受けて『大豆な弁当』の開発検討を行い、それを支援した。『大豆な弁当』は、ふくい味の祭典（11/22～23）にて 2 0 0 食を試験販売し完売した。

（8）ブドウ生産農家の育成（中川 文雄、ブドウ技術解決チーム担当普及指導員）

① 生産基盤の拡充

ア 指導者のスキルアップ

「今月の農業果樹部会」に併せてほぼ毎月、ブドウ技術解決チーム会議を開催し、進捗状況確認や活動計画に対する具体的な対応を検討した。

調査研究では普及指導員 3 名がブドウを題材に取り上げ、各地における課題解決を進めた。

農業試験場および園芸研究センターにおけるブドウに関する試験の実施状況に加えて、各地域に設置されている実践圃の栽培状況について現地で検討を行った。

市場への初出荷および「ふくぶる」ブランドによる初めての販売を開始するにあたり、7 月 18 日 J A 経済連において、福井市場や各 J A の担当者を交えて出荷段ボール箱への箱詰め方法や出荷スケジュールを検討した。

また、7 月 22 日に美浜町内の 2 圃場において「ふくぶる」圃場審査の基準統一をはかった。

イ 農家の技術向上および実践圃の収量・品質向上

前年度までは、県下全域の栽培農家が 1 か所に集合して各種の栽培講習会を開催してきたが、栽培農家が増加して地域ごとの特色も出てきていることから、平成 26 年度は春季栽培講習会を 5 月 13 日・15 日・16 日に坂井市・鯖江市・小浜市の各地域で開催した。花穂整形（房づくり）やジベレリン処理（無核化）等に関して講習を行い、農家の技術向上をはかった。

さらに出荷目揃い会も福井 8 月 5 日、坂井 7 月 23 日、丹南 7 月 31 日、二州 7 月 22 日、若狭 9 月 25 日と地区ごとに開催した。各地区

で講習会を開催したことで多くの質問が出て、各農家の技術習得が進んだ。

10月29日開催の農林水産支援センター研修会では、坂井北部丘陵地農業団地センターおよびピアファーム圃場(あわら市)を会場に、石川県ルビーロマン研究会参与の嶋雅康氏を講師に招き、現場で問題になった着色不良の対策など栽培技術と併せて、現地圃場においてせん定の実演により技術習得を進めた。

平成27年1月22日、アオッサにおいてふくいブドウネットワーク会員による意見交換会を開催した。意見交換に先立ち、試食PR会場で調査したアンケート結果を谷口主任から報告した。この結果を踏まえて意見交換を行ない、「ふくぷる」商標ができたことで販売しやすくなった等の効果はみられるが、県産ブドウの知名度は不十分で、より多くの県民に味わってもらうために数量確保と品質の向上が必要などとする意見がまとまった。

ウ 新植の推進

ブドウ栽培の推進開始から3年が経過して施策の周知が進んできたことに加え、米価の低下に対して園芸品目への進出で所得確保したいと模索する経営体が増えてきており、4月から27年1月までに県下合計で42件の相談に対応した。

地区別の推進研修会等の取組みは、8月12日坂井地区、27年1月21日丹南地区、8月8日若狭地区で各地区の実情を踏まえた内容で開催している。

また、県下全域を対象とした推進は「ブドウ栽培にチャレンジ研修会」を8月28日に開催し、植栽間もないか、ブドウの植歳を検討している23経営体のべ30名の参加を得て、20品種の食べ比べに加え、農業試験場や福井市内の実験圃等の視察を行い、品種選定や植栽計画の参考としてもらった。

こうした新植推進の結果、27年1月までに県下全体では19件の新植計画が進んでいる。

② 販売チャネル開拓

ア 福井県産ブドウのPR支援

26年1月のブドウネットワーク総会で決定した県産ブドウの愛称「ふくぷる」を、5月13日に坂井地区で開催した春季栽培講習会の会場においてマスコミ向けに公表した。

イ 販売チャネルの開拓

26年から市場出荷を計画し、市場やJA経済連の担当者との協議を重ねて「ふくぷる」シールや出荷段ボール箱を決定した。また、「ふくぷる」の認定制度を創設し、基準となる品質基準を検討・設定した。市場出荷ではJAに荷受け検査や精算事務を担当してもらう必要があり、関係するJAに対して出荷販売に関する概要を説明し、理解を得て市場出荷に関わってもらうことになった。

これらの活動により、各農家が市場出荷または直売のチャネルを選択しながら、各自の品質や数量に適合した「ふくぷる」出荷販売が行われた。

○ブドウ技術解決チーム担当普及指導員

冬廣吉朗(嶺南振興局二州農林部駐在)、中川文雄(丹南農林総合事務所農業経営支援部駐在・チーム長)、野崎直(嶺南振興局農業経営支援部駐在)、谷口弘行(坂井農林総合事務所農業経営支援部駐在)

(9) 越前水仙の販売拡大と安定生産の推進(榎本 博之)

① 活動対象とねらい

越前町すいせん部会、こしの水仙部会、河野水仙生産組合を活動対象として、既存産地(海岸付近)と新規産地(内陸平坦地)の安定生産及び品質向上および共同生産体制の誘導について検討した。

② 本年度重点を置いた活動

ア マーケットインに対応した販売拡大促進

華道協会、花商組合等の小売店の実需者が利用する方法や時期について調査した。また、関西市場での小売店や仲卸の販

売方法について調査し、販売促進、水仙のPRを行った。さらに、首都圏での流通拡大に向けたマーケティング活動の強化を実施した。

イ 生産技術の向上と出荷量拡大

- ・新規生産者の掘起し
- ・ハウス平坦地栽培の推進

県30→42a

生産者数 県24戸+5G 2戸増加

平坦地 37.0万本出荷(昨年35.1万本)

- ・造成地における拡大志向の生産者育成：1戸
- ・改植ボランティアの推進 改植面積3a(H26)
- ・県全体出荷本数275万本(目標270万本)

ウ 海岸地域の共同支援体制の推進

- ・除草作業、灌水作業への共同化誘導

除草剤の共同利用、共同防除するモデル集団を育成。梨子ヶ平、左右集落で7月に除草剤散布作業を実施。梨子ヶ平集落をモデルに、除草剤利用等の共同作業について生産者間で話し合いが進んだ。

- ・露地栽培でも灌水作業等の実証圃を設置して、灌水の有効性が理解された。

③ 残された課題と今後の対応

- ・新規生産者の掘起しと育成
- ・球根養成圃場を作り供給体制を拡大する必要がある。
- ・除草剤利用の共同作業体系の推進
- ・エチレン処理で中球でも開花する技術確立と普及が必要となった。
- ・露地圃場での安定出荷のための灌水方法の普及
- ・収穫、選別、出荷作業の共同化モデルの構築
- ・新規エリアマーケティングの販売網の強化

4. 県民に開かれた研究機関を目指す活動

(1) アグリチャレンジLABOクラブ

農業や農業試験場に対する理解と関心を深めていただくため、広く県民の方々を対象としたイベントをゴールデンウィークと夏休みに開催した。

ゴールデンウィークに開催した「わくわく農試探検隊」では、農業試験場が開発を進めているポストこしひかりについてPRすると同時に、農業試験場で栽培している作物を採るウォークラリーや「ポストこしひかり」についてのミニ講演と展示、お米の味比べ、家庭菜園相談コーナーなどを行った。福井市内はもとより、敦賀市や春江・三国町などからも来場いただき、年配の方と小さいお子さんを伴った家族連れの方が多かったことから、年配の方の農業に関する関心の高さを感じた。

夏休みに開催した「アグリチャレンジLABOクラブ 農業試験場公開デー」では、小学生の夏休み自由研究に生かしていただける体験を主として行った。福井市内を中心に、ご家族皆さんやお子さんの友達もつれての参加など、大人数で参加していただいた。また、参加いただいた皆さんは、参加申し込みされた体験終了後も別の体験に続いて参加される熱心な方が多く、長時間に渡りイベントを楽しんでいただけた。このことから、今回来場いただいた方たちの関心の高さを強く感じるとともに、幅広

い年齢層のお子さんに参加いただき、小さいお子さんに農業について触れてもらう良い機会となった。

夏休みに開催した園芸体験イベント「夏休み親子やさい・くだもの探検隊」では、地域の子供たちに農業の魅力を体験していただくとともに園芸研究センターの取組みを知っていただける体験を主として行った。来場された小さいお子さんと保護者の方に全ての体験を行っていただけたことから、このイベントを通して十分に農業の魅力に触れていただくことができた。

今後の課題として、より多くの方にイベントで来場していただけるよう、日時・時間・内容・PR方法などを考えていくとともに、地域の他の施設やイベントと連携した企画を考え実施していきたい。

「わくわく農試探検隊」 5月3日(土) 10:00~15:00

【於：農業試験場】

No.	体験名	内容	場所・担当	対象・参加人数
1	ウォークラリー	農業試験場の圃場内5ヶ所のチェックポイント探検(ポイントで職員説明)	農業試験場 圃場周辺 農業試験場職員10名	一般~小学生 37名
2	お米の食べくらべ	コシヒカリと他のお米3種の食べ比べ体験(お米の“食味”への理解深化)	農山漁家生活近代化センター ポストコシヒカリ開発部 小木主事ら3名	一般~小学生 39名
3	コシヒカリとポストこしひかりのミニ講演と成果展示の見学	講演と研究成果展示(農業試験場で行ってきた水稻育種研究とポストこしひかりの今後の展望について理解深化)	農山漁家生活近代化センター ポストコシヒカリ開発部 清水部長ら3名	一般~小学生 47名
4	家庭菜園および作物相談コーナー	相談者の農作物栽培への疑問に対する、専門職員による適切なアドバイス	農山漁家生活近代化センター 井上部長、高野課長、山口主任	一般 6名

「アグリチャレンジLABOクラブ 農業試験場公開デー」 7月26日(土) 10:00~15:00

【於：農業試験場】

No.	体験名	内容	場所・担当	対象・参加人数
1	お米の品種育成について学ぼう	お米の品種育成やお米の種類による違いに関する学習と、本格的なお米の食味調査体験	農山漁家生活近代化センター ポストコシヒカリ開発部 清水部長ら3名	小学生・保護者 21名
2	麦茶を手作りしてみよう	大麦に関する学習と、乾燥させた大麦を参加者自身が炒って作る麦茶作りやいろんな種類の麦茶の試飲	農業試験場 小会議室 作物部 中村主事ら3名	小学生・保護者 53名
3	虫の世界をのぞいてみよう	本格的な顕微鏡を用いた様々な虫の観察体験	農業試験場 大会議室 有機環境部 伊達部長ら5名	小学生・保護者 28名
4	水やいろんな飲料を分析してみよう	硬水と軟水の違いや果物と飲料の酸性度をパックテストやpH試験紙を使って測定し、味の違いなどを数値で比較	農業試験場 大会議室 有機環境部 細川研究員ら4名	小学生・保護者 28名
5	米粉でMyピザを作ろう	米粉で作った生地を使ったピザ作り体験	農山漁家生活近代化センター 高度営農支援課 高野課長ら5名	小学生・保護者 61名

6	普段食べられないお米を試食してみよう	インディカ米や古代米、コシヒカリの先祖などを試食し違いを体験	農山漁家生活近代化センター ポストコシヒカリ開発部 富田主任研究員ら3名	小学生・保護者 75名
7	大麦の茎でシャボン玉を飛ばそう	大麦の茎を利用しストローの代わりに用いた、シャボン玉飛ばし体験	農林水産支援センター 入口 園芸研究センター 篠山主任研究員ら2名	小学生・保護者 43名

「夏休み親子やさい・くだもの探検隊」 8月23日(土) 10:00~12:00

【於：園芸研究センター】

No.	体験名	内容	担当	対象・参加人数
1	ウメシロップと野菜シャーベットづくり体験	今年収穫した冷凍ウメを使ったウメシロップとミディトマトシャーベットづくり体験	園芸研究センター 神田研究員ら8名	小学生・保護者 44名
2	園芸関連クイズ『これってナニかな?』	ブドウ、ナシ、イチゴなどの果樹・野菜に関するクイズと農業機械の紹介	園芸研究センター 加藤主事ら9名	小学生・保護者 44名
3	ブドウ、ナシの試食	センター内で栽培しているブドウ、ナシの紹介と試食	園芸研究センター 三輪研究員ら8名	小学生・保護者 44名

(2) 園芸教室

嶺南地域の農芸振興を図るため、野菜を中心とした栽培技術の基礎を習得する場として農業者だけでなく広く地域住民を対象に、年間を通して定期的に開催した。全体の出席率は約70%。講義中には積極的に質問が出され、関心の高さが窺われた。感想としては、「全体を通して良かった」という声や、「来年も受講したい」と当教室の継続を望む声も多かった。

「園芸教室」 4月15日(火)~12月16日(火) ※定期的に開催 9:30~11:30

【於：園芸研究センター】

No.	開講日	講義内容	担当	対象・参加人数
1	4月15日	開講式 野菜栽培の基礎知識と春夏野菜の栽培準備と定植	園芸研究センター 所長・室長・総括・滝 講師	一般・農楽舎生 35名
2	5月20日	春夏野菜の病害虫と防除方法	園芸研究センター 滝 講師	一般・農楽舎生 35名
3	6月17日	野菜の土づくりと肥料	園芸研究センター 滝 講師	一般・農楽舎生 31名
4	7月15日	秋野菜の準備と定植	園芸研究センター 滝 講師	一般・農楽舎生 23名
5	8月19日	秋の草花栽培管理	園芸研究センター 滝 講師	一般・農楽舎生 27名
6	9月16日	越冬野菜の病害虫と防除方法	園芸研究センター 滝 講師	一般・農楽舎生 21名
7	10月21日	果樹の栽培管理	園芸研究センター	一般・農楽舎生

			滝 講師	23名
8	11月18日	越冬野菜の栽培管理	園芸研究センター 滝 講師	一般・農楽舎生 26名
9	12月16日	家庭菜園の栽培計画と野菜の育苗 閉講式	園芸研究センター 所長・室長・総括・滝 講師	一般・農楽舎生 26名

(3) 水田農業・水稲作飛躍のための技術研修会

水稲作を中心とした水田農業に携わる方々に、最新の研究成果を踏まえた技術等の導入を推進し、今後の農業生産および農業経営に役立てていただくため、嶺北と嶺南の計2会場において、福井県農業試験場の主催で技術研修会を開催した。5つのテーマで発表を行うとともに、会場入口に設置したポスター展示による情報発信も行った。発表の一つとして、年間を通して農業試験場との連携活動に取り組んできた福井農林高校生によるプロジェクト活動発表を、今年度初めて行った（嶺北会場のみ）。

水田農業に関する技術研修会ということで、嶺北会場では331名と昨年度の270名を大きく超える方の参加をいただいた。参加者からは、「メガファームの取り組み」や「米の食味向上に関する取り組み」について、多くの質問・意見・要望があり、非常に関心が高いことが伺えた。また、アンケートの理解度・参考度調査では、ほとんどのテーマで約9割以上の方から「よくわかった」「だいたいわかった」との回答があり、特に「米食味ランキング 特Aの生産条件」に関しては、「実践したい」「参考になる」という回答が9割を超えた。

研修会名	場 所	開 催 日 時	参加者
水田農業・水稲作飛躍のための技術研修会 (嶺北会場)	福井県立大学 (福井キャンパス) 講堂	平成27年2月18日 13:30~16:00	331人
水田農業・水稲作飛躍のための技術研修会 (嶺南会場)	美浜町生涯学習センター なびあす ホール	平成27年2月25日 13:30~16:00	70人
計			401人

(4) スマート園芸研修会

将来の地域農業を担うかみなか農楽舎研修生をはじめ若い施設園芸志向者を対象に、県で推進している野菜を安定的に高品質高生産できる大規模園芸施設等に関する研究成果を踏まえた研修会を、福井県園芸研究センターの主催で開催した。

スマート園芸に関する3テーマ（「ミディトマト栽培における地下水熱利用型ヒートポンプの利用」「パプリカの高収量栽培技術」「夏イチゴの栽培技術確立」）で、発表および質疑応答を行った。各発表後の質疑応答では大変多くの質問があり、かみなか農学舎で農業に携わる方たちの意欲の高さが伺われ、非常に今後の活躍が楽しみに感じる内容となった。

研修会名	場 所	開 催 日 時	参加者
スマート園芸研修会	有限会社かみなか農楽舎	平成27年3月11日 10:00~11:45	14人

(5) 農業試験場プレスリリース実績

No	投込日	タイトル	担当部所
1	4月24日	「わくわく農試探検隊」を開催します！	企画・指導部
2	5月9日	「ポストこしひかり」候補の田植え始まる	ポストコシヒカリ開発部
3	5月23日	農業高校生を対象に農業試験場の圃場で授業を行います (梨の摘果作業講習) (ポストこしひかり品種開発のための生育調査実習)	園芸研究センター ポストコシヒカリ開発部
4	6月16日	「ポストこしひかり」授業を開催します	ポストコシヒカリ開発部
5	7月8日	「アグリチャレンジLABOクラブ」の参加者を募集します	企画・指導部
6	7月17日	福井県日本調理技能士会で米の食味調査会を行います	ポストコシヒカリ開発部
7	7月23日	「アグリチャレンジLABOクラブ」を開催します	企画・指導部
8	7月28日	「県産大豆生産利用拡大現地検討会」を開催します	企画・指導部
9	8月20日	「夏休み親子やさい・くだもの探検隊」を開催します	園芸研究センター
10	8月22日	農業試験場の果樹園で福井農林高校の実習授業を行います	園芸研究センター
11	9月4日	「ポストこしひかり」候補の稲刈りが始まります	ポストコシヒカリ開発部
12	10月17日	「はじめての果物づくり講習会」を開催します	園芸研究センター
13	10月29日	福井農林高校の学校祭で米の食味調査を行います	ポストコシヒカリ開発部
14	10月31日	「果物づくり講習会」を開催します	園芸研究センター
15	12月9日	農業試験場の果樹園で福井農林高校の実習授業を行います	園芸研究センター
16	1月21日	ブドウの販路拡大等に向けた意見交換会を開催します	企画・指導部
17	2月9日	生産者が取り組みやすい水稻の有機栽培技術研修会を開催します	企画・指導部
18	2月17日	平成26年度水田農業・水稻作飛躍のための技術研修会を開催します	企画・指導部
19	2月23日	ポストこしひかり研究授業「お米のおいしさについて学ぼう!」を行います	ポストコシヒカリ開発部

5. 農業者、消費者との意見交換

(1) 福井市内における酒米へのニーズ調査

開催日	場 所	対 象	内 容
平成26年9月2日(火)	奥越地域	酒米	酒米作見会
平成26年10月6日(月)	農業試験場	酒米	酒米への要望調査 (県酒造組合)
平成26年10月8日(水)	吉田酒造	酒米	酒米への要望調査
平成26年10月15日(水)	舟木酒造	酒米	酒米への要望調査
平成26年10月31日(金)	農業試験場 (アバザリーボート)	酒米の育種	兵庫県立農林水産技術総合センター 酒米試験地 池上勝氏 酒酒米育種に関する情報収集
平成26年11月27日(水)	一本義久保本店	酒米	酒米への要望調査
平成26年12月24日(水)	黒龍酒造	酒米	酒米への要望調査

平成27年 2月16日 (月)	片山酒造	酒米	酒米への要望調査
平成27年 2月17日 (火)	南部酒造場	酒米	酒米への要望調査
概要および主な意見等			
・新しい酒米には、精米耐性、吸水の安定性、高温登熟耐性などが求められている。			

(2) ポストこしひかり開発に関する専門家からの情報収集

開催日	場 所	対象者	内容 (人数)
平成26年4月16日 (水)	パナソニック	パナソニック炊飯器開発者 加古さおり氏	炊飯器開発者からの情報収集
平成26年5月16日 (金)	農業試験場	理化学研究所 七夕高也氏	炊飯米の画像分析に関する 情報収集
平成26年6月10日 (火)	農業試験場	パナソニック炊飯器開発者 加古さおり氏	炊飯器開発者からの情報収集
平成26年6月26日 (木)	農業試験場	理化学研究所 七夕高也氏	炊飯米の画像分析に関する 情報収集
平成26年7月11日 (金)	ホテル日航大阪他	関西圏料理人	お米に関する情報収集
平成26年7月18日 (金)	スズノブ、小峰米穀	都市圏米穀店	お米に関する情報収集
平成26年7月21日 (月)	あわら温泉グランディア芳泉	福井県日本調理技能士会	食味嗜好調査 59名
平成26年7月30日 (水)	農業試験場	都市圏米穀店	ふなくぼ米穀店
平成26年10月29日 (水)	ホテルニューグランド (横浜市)	長谷信明シェフ	お米に関する情報収集
平成26年11月13日 (木)	農業試験場	日本穀物検定協会関西支部 竹下 学氏	専門機関からの食味調査アド バイス
平成26年11月21日 (金)	国際交流会館	スズノブ、全国各県水稻育種 担当者	食味についての意見交換会
平成26年11月28日 (金) ～29日 (土)	横井、津ツ井、赤坂若狭、萬 作、グローバルフード、薬糧 開発等、望洋楼	都市圏料理人	お米に関する情報収集
平成26年11月29日 (土)	ふくい南青山291 (東京都港 区)	一般	食味嗜好調査 85名
平成27年1月22日 (木)	サンケイリビング (東京)	首都圏消費者	お米・ご飯食に関するニーズ 実態調査
平成27年2月20日 (金)	農業試験場	パナソニック炊飯器開発者 加古さおり氏	ポストこしひかり候補に関する 食味評価
平成27年2月20日 (金)	坂井農林総合事務所	服部幸應氏ほか料理関係者5 名	ポストこしひかり候補に関する 嗜好調査
平成27年2月25日 (水)	天谷調理製菓専門学校	学生・講師	食味嗜好調査 74名

概要および主な意見等

- ・一般の消費者や食の専門家に対して嗜好調査を行い、消費者が好む米がコシヒカリと比較してどのような特徴を持つかを調査した。
- ・もちもち感があることが重要であり、硬さは好みによって分かれることが明らかとなった。

6. 論文、雑誌、著書、発表、広報等

(1) 農業試験場刊行成績書

刊 行 成 績 書	部 所 名
平成 26 年度 福井県農業試験場研究報告	企画・指導部
平成 25 年度 水稻・麦・大豆栽培・営農作業、種子生産技術試験成績書	作物部
平成 25 年度 土壤保全対策事業成績書 土壤肥料試験成績書	有機環境部
平成 25 年度 病害虫に関する試験成績	有機環境部
平成 25 年度 植物防疫年報	病害虫防除室

(2) 論文

- ・古畑昌巳、田野井真、富田桂、小林麻子、関正裕 北海道、東北、北陸地方の良食味水稻品種および「越南 242 号」の低温土中出芽性の評価 日作紀 83 : 382-367 (2014)
- ・林猛・小林麻子・田野井真・富田桂 DNA マーカー選抜に用いる籾殻付きイネ種子からの DNA 抽出 育種学研究 16 : 121-124 (2014)
- ・小木芳恵・七夕高也・富田桂・小林麻子 : スキャナと画像解析ソフトを用いた炊飯米の白さの測定法 育種学研究 16 : 115-120 (2014)
- ・北陸南部の気象下における主要作物の高品質安定生産のための栽培研究および普及 井上健一 北陸作物学会報 49 : 1-2
- ・再生イネに着生する籾の発芽力と漏生イネ発生の関係 田中 勲・井上健一 北陸作物学会報 49 : 72-75
- ・加水処理による大麦子実の硝子粒率低減 奥村華子・和田陽介・井上健一 北陸作物学会報 50 (印刷中)

(3) 雑誌

- ・小林麻子 : 水稻の高温耐性に関する遺伝的要因と育種戦略 育種学研究 第 16 卷 2 号 p47-48
- ・井上健一 : 水稻登熟期の夜間灌水の効果 米麦改良 8 月号 p11-15
- ・井上健一 : 米の外観品質・食味研究の最前線[36] ー高温登熟障害の克服に向けた福井県の取り組みと今後の課題 農業および園芸 89 卷 10 号 p1007-1012
- ・高岡誠一 : 冬季の DBN 散布で夏季の斑点米対策 植調 第 48 卷 第 6 号 p16-21
- ・高岡誠一 : 秋冬期の除草剤散布で斑点米を減らす 植物防疫 9 月号 p48-51
- ・高岡誠一 : 積雪前の除草剤散布で斑点米が激減 米麦改良 10 月号 p2-7
- ・高岡誠一 : DVD 雑草管理の基本技術と実際 田んぼ・あぜの雑草 農文協 第 2 巻

(4) 著書

- ・井上健一：稀植水稻の物質生産及産量、品質。机挿水稻稀植栽培新技術 p96-109 江蘇大学出版社（共著）

(5) 学会等講演発表

- ・小林麻子、片岡知守、小木芳恵、田村克徳、富田桂（2014）ヒノヒカリノにこまるのRILを用いた炊飯米の理化学特性に関するQTL解析。日本育種学会第126回講演会，2014.9.26 都城市
- ・七夕高也、片岡知守、小林麻子、堀清純（2014）圃場での形質評価作業を効率化するための携帯端末アプリの開発。日本育種学会第126回講演会 2014.9.26 都城市
- ・小木芳恵・小林麻子・富田桂：米飯の食味官能評価とアミロペクチン構造の関係 日本水稲品質・食味研究会第6講演会 一般講演 2014.11.8 京都市
- ・七夕高也、片岡知守、小林麻子、堀清純、磯部祥子（2015）iYacho: Development of Digital Field Note Application for Rapid and Accurate Plant Phenotyping. International Plant & Animal Genome XXIII, 2015.1
- ・小林麻子、七夕高也、相良直哉、富田桂、小木芳恵、田野井真（2015）画像解析による炊飯米の外観の評価。日本育種学会第127回講演会，2015.3.22 町田市
- ・林猛、小林麻子、富田桂、清水豊弘：吸湿法および刈遅れ法による胴割れ耐性に関するQTL解析（2015） 日本育種学会第127回講演会 一般講演 2015.3.22 町田市
- ・小木芳恵・鈴木啓太郎・小林麻子・富田桂：炊飯初期の吸水・糊化過程に関する品種間差日本育種学会第127回講演会 ポスター発表 2015.3.22 町田市
- ・笈田豊彦・中村真也：期による水稻の食味関連要素（タンパク・味度）の変動（北陸作物・育種学会第51回講演会 一般講演7月19日 富山市）
- ・奥村華子・和田陽介・井上健一：加水処理による大麦の硝子質粒の低減（北陸作物・育種学会第51回講演会 一般講演7月19日 富山市）
- ・酒井 究：福井県内大豆圃場における収量、品質低下要因（北陸作物・育種学会第51回講演会 一般講演7月19日 富山市）
- ・Yoshida,S.,Inoue,K.,Oida,T.,Nakamura,S.,Nishida,K. :Simple storage function approach to risk evaluation of wet injury of upland crops cultivated in paddy field (The 13th Conference of International Society of Paddy and Water Environment Engineering Oct. 30-31 Kaoshung)
- ・頼本英明：越前スイセンの開花促進技術の取り組み（ふくい農林水産支援センター研修 5月20日 越前町）
- ・神田美奈子：シカの食害によるウメ樹およびウメ園地への影響（日本土壤肥料学会中部支部第94回例会 一般講演 11月13日 敦賀市）
- ・頼本英明：エチレンを用いた球根処理による越前スイセンの開花向上技術（越前水仙統一目揃会 11月17日 越前町）
- ・桜田真一他：福井県におけるミディトマト育種素材に適する海外トマト品種の選定（平成26年度園芸学会北陸支部大会 研究発表会 11月28日 金沢市）
- ・神田美奈子：水田転換圃場の排水対策について（平成26年度 白干梅品評会表彰式及び福井梅生産者研修会 12月9日 若狭町）
- ・神田美奈子：私のキク圃場の肥料は合っているの？キク圃場の正しい改善（平成26年度奥越地区農繁期前キク勉強会 2月20日 大野市）
- ・吉田貴寿：ウメ‘福太夫’の新梢管理が樹冠内の光環境と熟期に及ぼす影響（平成26年度園芸学会北陸支部大会 研究発表会 11月28日 金沢市）
- ・三輪直邦：日射量がブドウ‘シャインマスカット’の蒸散量に及ぼす影響（園芸学会北陸支部大会 11月28日 金沢市）
- ・細川幸一・井上健一：六条大麦の全量基肥施肥栽培における窒素の由来(中部土壤肥料研究会第104回例会 一般講演 11月13日 福井県敦賀市)

- ・西浦愛子・細川幸一：有機質肥料のC/N比と無機化率およびイネの窒素吸収量(中部土壤肥料研究会第104回例会 一般講演 11月13日 福井県敦賀市)
- ・竹内早希子・小木芳恵・瀬野早苗・坪内均・水澤靖弥・神田美奈子・斉藤正志：畑作物に対する牛ふん糞堆肥、農業集落排水汚泥の長期連用における化学肥料窒素代替の検討(中部土壤肥料研究会第104回例会 一般講演 11月13日 福井県敦賀市)
- ・福田明美：うどんこ病に抑制効果をもつ微生物の探索と選抜菌株による発病抑制効果の検討(第67回北陸病害虫研究会 一般講演 平成27年1月28日 長岡市)
- ・渡辺和夫：事例から学ぶ～地域活性化に向けた視点と考え方～(丹生農業活性化研修会・丹生農業改良振興会主催) (H27年2月27日 越前町)
- ・渡辺和夫：『地域』を守る連携のすすめ～ネットワーク型農業の取組み～(多様な担い手が支える地域農業のあり方研修会・奥越農業振興協議会主催) (H27年2月28日 大野市)

講演他

- ・清水豊弘「ポストこしひかりの開発状況」 2014.4.24 上文殊公民館
- ・小林麻子 農業試験場の仕事とポストこしひかり品種の開発 進明中学校ゲストティーチャー, 2014.6.26
- ・小林麻子 農業試験場の仕事とお米の品種改良. 清水西小学校総合学習, 2014.7.15
- ・小林麻子(2014) 水稻の高温耐性に関する遺伝的要因と育種戦略. 天津市-東京大学“城郷融合可持続発展”プロジェクト 10周年記念シンポジウム 2014.8.21
- ・小林麻子 お米のはなし. ホテルニューグランド秋の感謝祭 “産地と技の饗宴 福井フェア” 2014.10.29
- ・小林麻子(2014) 福井県における水稻育種の課題とゲノム育種への期待. 作物ゲノム育種研究センター設立記念シンポジウム 2014.11.5
- ・田野井真「ポストこしひかりの開発状況」 2014.11.21 鯖江市図書館(文化の館)
- ・富田桂 「福井のお米」平成26年度福井ライフアカデミーふるさと学習講座 2015.1.14 福井県生活学習館
- ・清水豊弘「ポストこしひかりの開発状況」 2015.1.20 奥越農林総合事務所
- ・清水豊弘 「コシヒカリが生み出した福井県の米文化」 東京都 2015.1.23
- ・林猛 「ポストこしひかりの開発状況」 2015.2.21 FBCラジオ
- ・田野井真「ポストこしひかりの開発状況」 2015.3.5 JA若狭

(6) 広報

①日本農業新聞 アグリトゥモロウ

- ・窪田博之：吹き上げ防除でウメの農薬費3割削減(4月19日掲載)
- ・井上健一：夜間かん水で品質のよい米作り(6月21日掲載)
- ・奥村華子：六条大麦の硝子質粒の低減技術(9月20日掲載)
- ・倉田源一郎：今年の稲作を振り返って(12月20日掲載)
- ・窪田博之：梅の新たな防除体系(1月24日掲載)
- ・中川文雄：県内全域でブドウ産地づくり(2月28日掲載)
- ・山口秀武：白ネギの収量・品質向上対策技術(3月21日掲載)

②ふくい植防だより

- ・増田周太：【技術レポート】水稻ニカメイガの発生動向と今後の対応について 第66号 平成26年6月10日 p4-6
- ・渡辺貴弘：ストロビルリン系殺菌剤耐性いもち病菌と対策について 第67号 平成27年1月7日 p9
- ・高岡誠一：平成26年の気象と病害虫の発生概況 第67号 平成27年1月7日 p2-4

7. 職員の研修、客員教授の招聘、職員の受賞

・職員の国内・国外研修

氏名	研修内容	期間	派遣先
小木芳恵	平成26年度米飯の科学的食味評価法の習得	平成26年10月6日～12月26日	独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 作物研究所 (つくば市)
林 猛	栽培試験における気温の観測技法と利用	平成26年6月11日～6月13日	農林水産技術会議事務局筑波事務所等

8. 一般報告

(1) 施設

①□ 本場	福井市寮町辺操 52-21	
	本場本館 (鉄筋3階建)	2,524.52 m ²
	作業室その他 64棟 (農業研修館、近代化センター含む)	8,802.03 m ²
	計	11,326.55 m ²
	水田圃場	41,752.00 m ²
	原種圃場	38,943.00 m ²
	そ菜および普通畑	10,661.20 m ²
	果樹園	18,176.00 m ²
	敷地および水路	67,556.20 m ²
	山林その他	116,745.74 m ²
	計	293,834.14 m ²
② 園芸研究センター	三方郡美浜町久々子 35-32-1	
	本館 (鉄筋2階建)	1,152.91 m ²
	収納調査棟その他 13棟	2,321.82 m ²
	計	3,474.73 m ²
	宅地	108.76 m ²
	田	21,068.10 m ²
	畑	52,471.60 m ²
	原野	1,880.40 m ²
	雑種地	3,688.60 m ²
	計	79,217.46 m ²

(2) 予算

①□ 歳入 (平成26年度決算 3月17日現在)

項 目	決算額(千円)	摘 要
生産物売払収入	7,438	農産物売払代
農林水産使用料	309	行政財産使用料、自動販売機貸付料
雑 入	3,142	保険料被保険者負担金、電気料・水道料個人負担金、特許料返金、その他
計	10,889	

② 歳 出 (平成26年度決算 3月17日現在)

項 目	決算額(千円)	摘 要
本 場 運 営 費	78,050	農業試験場の維持管理、人件費
試 験 場 運 営 費	37,280	園芸研究センター・圃場・母樹園等の維持管理、人件費
園芸研究センター機能強化事業費	148,611	スマートアグリ研究施設整備費

戦 略 的 研 究 開 発	16,975	大規模営農組織の生産性向上技術の開発、スペシャルミディトマトの新品種育成、福井発五ツ星ブランド水稻新品種の育成等
ニ ー ズ 対 応 型 研 究 開 発	10,657	水稻の良食味性の科学的解明、作物性の高い水田転換ウメ園の増収技術の確立 等
地域科学技術振興振興研究事業	34,401	生き物に優しい‘ポストこしひかり’特栽技術の開発、スマートアグリ技術の開発ミディトマト・パプリカ・夏イチゴ等
農 林 水 産 の 技 術 開 発	1,348	提案型共同研究、パイロット研究
農 業 総 務 費	7,005	試験研究企画、農林水産情報システム事業、農林水産新技術等習得事業、伝統地場農産物等原種事業 等
農 業 振 興 費	2,025	くだもの産地育成事業、「地産外商」フードビジネス推進事業、薬草栽培技術確立事業、「コシヒカリ」全国作付面積日本一30周年記念事業 等
農 作 物 対 策 費	11,791	基本調査事業、原原種原種ほ設置事業、優良種子生産体制確立事業、、肥料検査登録事業、土壌由来温室効果ガス事業、モニタリング調査事業、基準点調査事業 等
農 業 改 良 普 及 費	4,279	普及指導員研修費、県域普及員活動費、農山漁家生活近代化センター費、県産大豆生産拡大事業 等
植 物 防 疫 費	5,321	農薬抵抗性検定事業、病害虫発生予察事業、病害虫防除所運営事業、減農薬防除体系実証事業 等
一 般 管 理 費	4	赴任旅費
財 産 管 理 費	95	県有自動車管理
中 小 企 業 振 興 費	16,433	地域科学技術振興研究事業
計	339,874	

平成26年度
福井県農業試験場 業務年報

平成27年3月発行

編集・発行 福井県農業試験場

代表者 嶋田奥左エ門

福井市寮町辺操 52-21

TEL (0776)54-5100